42
810
大15

現代文新鈔

5

版五正修

東京
光風館藏版

42054
教科書文庫
4
810
41-1926
20000
b5465

資料室

文部省檢定濟
大正十五年六月七日　中學校國語科教科用

教科書文庫
4
810
41-1926
2000065465

吉田彌平編

現代文新釋

卷五

広島大学
教
65465
図書

広島大学図書
2000065465

東京
光風館藏版

42
810
大15

現代文新鈔　卷五

目次

一　レオナルドに逢ふ日……矢代幸雄　一
二　光あれ……姉崎正治　七
三　夢殿……一四
四　病牀六尺……正岡子規　一八
五　薔薇の芽……正岡子規　二五
六　運命の丘……島村抱月　二七
七　輝ける野の美感……井上康文　五〇
八　海潮の響……吉江喬松　五三
九　生の寂しみ……相馬御風　六四

一〇　羊齒の葉……齋藤茂吉　七七
一一　身邊雜事……阿部次郎　七九
一二　勞働と人生……綱島梁川　八四
一三　現代日本の詩歌……北原白秋　一〇九
一四　牛肉と馬鈴薯……國木田獨歩　一二〇
一五　草の光……吉田絃二郎　一四六
一六　一分……幸田露伴　一五五

現代文新鈔　卷五

一　レオナルドに逢ふ日

矢代幸雄

レオナルド　イタリヤの畫家でまた彫刻家建築家フイレンツエの畫家ヴエルロッキオに學んで早く出藍の譽があつたその傑作は「最後の晩餐」「モナリサ」「岩窟の聖母」など

Leonardoda Vinci (1452–1519)

矢代幸雄　美術史家　東京美術學校教授

一

此の大きな悅を如何にして傳へよう。あらゆる豫想を裏切つて美しい、そして偉いレオナルド、ダ、ヴィンチの繪の前に坐つて、私は今泣きさうになつて居る。

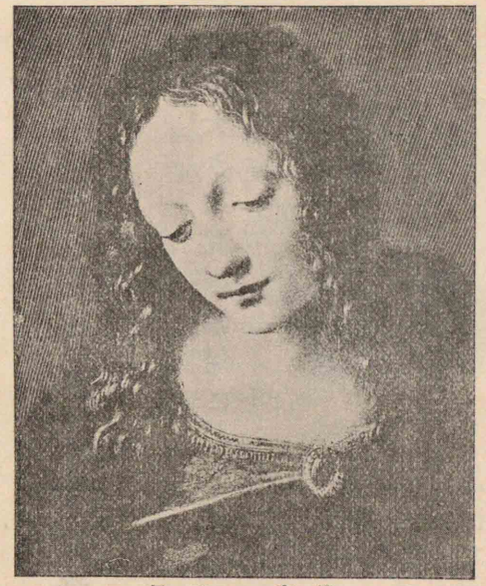
矢代幸雄

私は此の世に於てこんな幸福に逢はうとは思はなかつた。倫敦に着いて一週間になる。私は毎日ナショナル、ガラリーの此の「岩窟の聖母」の前に禮讚に來る。始めて海外へ來た美術史の研究者として

一　レオナルドに逢ふ日

ナショナルガラリー　National gallery　繪畫博物館ロンドンのは一八二四年設立　今の建物は一八三二年起工　その後次第に增築

の私は、倫敦に見なければならない澤山のものゝあることを知つて居る。けれども未だとてもそれを見る氣になれない。今、レオナルドが



岩窟の聖母

私の全部を支配して居る。私が永年是に逢ひたがつて捜し索め何處に在るとも知らないで憧れきつて居た世界は是だつた。毎日來て毎日新しい神祕が奥から奥へと展開する此の繪。無限だ。いつになつたならば此の繪が見きれると云ふのだ。あらゆる意味が其の中に在る。私の生涯のあらゆる悲哀も研究も體驗も、レオナルドを解し懷かしむ爲にあつたとしか思はれない。

眼をあげて繪を見る、高山の夜よりも靜かな靜けさが、海の底の青よ

マリヤ　Maria　聖母　モナリサ　Mona Lisa　佛國ルーヴル博物館にあるレオナルドの畫いた肖像畫　フィレンツェの名家ジオコンド夫人をモデルにして一五〇四年まで四年かゝつてかいたがまだ未成品と自らいつたもの　ヨハネ　Johannes

りも深い青色を以て滿へられて居る。あの青は變な青だ。美しい青だ。恐しい青だ。吸ひこまれる青だ。怖いけれども見ずには居られない青だ。レオナルドの色だ。

それよりもマリヤの顏を見よ。金光ともつかず、銀色の光ともつかず、とても此の世に在り得ない光に照されて、マリヤ――私はこゝまで書いて再び眼をあげてマリヤを見たら、まだ胸が一ぱいになつた。何と書けばいゝと云ふのだ。此の稿を讀む人はこゝに涙ばかりこぼして居る私を笑ふだらう。

私は感傷主義を排する人間なのだ。しかし今此の畫に對しては何ともたまらない。神の如き靜けさを以て自然と人の本質を凝視したレオナルドも、私の此の感傷をかしがるかも知れない。いや、そんな事はない。眼を繪にやれば、マリヤも、ヨハネも、幼き基督も、それにかしづく優しき天使も、皆慈雨の樣な憐みにあふれて居る。モナリサの微笑

を皮肉の笑とのみ解するのは當つて居ない　それも無論ある。しかしそれの上にまた憐みの愛の笑みが支配する。それがレオナルドの微笑だ。

雲の多い英吉利に日影が射すかと思へば翳る。翳つたかと思ふと、また忽ちに明るくなる。その度毎に此のレオナルドの繪が雲に從ふ海の色の呼吸する樣に面目を換へるのが變だ。今青い。青い。深淵の底に住むかと思ふ程に青い。ヨハネのひざまづく脚の下の水仙花が藻の花の樣に青い。今またすべてが暗い鳶色になつた。黃金の國の薄暮のやうだ。すべてが沈靜して、そして光に滿ちて居る。レオナルドが、「黃昏は人の顏が美しく見える。」と云つた、それだ。

ミケランジェロ　Michelangelo (1475–1564) イタリヤの彫刻家畫家建築家詩人

ラファエロ　Raphael (1482–1520) イタリヤの畫家

チ、ヤン　Titian (1477–1576) ヴェニスの畫家

二

ナショナル、ガラリーによい繪が澤山ある。ミケランジェロもラファエロもチ、ヤンもある。其等の中で、レオナルドだけが際立つて異つ

た世界を形作つて居るのはどう云ふ譯であらう。彼等の國を熱い地の國とするならば、レオナルドは正に涼しく透き徹る水中の世界だ。ひどい違ひ方だ。そこに藝術の要點があるのではなからうか。レオナルドを見てその世界に觸れないものは、レオナルドの友達ではないのだ。まして弟子でも何でもない。何の爲に繪を見るのだか解らない。無論、私もレオナルドの描法がヴェロッキオに負ふところの多い事を知つて居る。或は自然描寫の立場に立つたラスキンが、此の繪の岩石の重疊を地質學的に誤謬だと主張したことも、構圖が復興期の金字塔型を嚴守してゐることも、或はルーヴルの同じ繪と比べて、其の模寫だらうと疑ふ人のあることも知らないではない。けれども美學的或は美術史的の細目に此の繪を割付けて、知識的にをさまりをつけることが美術研究のすべてゞあつたならば、美術研究は憐れなものだ。道草だ。私はすべてを知らないで歸つてもよい。唯大きな魂に觸れ

ロッキオ　Verrocchio (1435–1488) イタリヤの彫刻家畫家

ラスキン　Ruskin (1819–1900) 英國の藝術批評家

ルーヴル　Louvre 巴里の中心にある王宮今は美術館

て歸ればよい。レオナルドの弟子になつて歸りたい。

レオナルドの生きて居た同じ世界に自分が生きて居ると云ふことはうれしい自覺だ。私はバイロンと同じ樣に離れ行く船上から、私に暗かつた祖國に左樣ならをした。私は、船が西に駛るにつれて世界が急に明るくなつた。故鄕に遠くなる寂しい心よりも、過去を切りはなして自由を痛感する快さの方が切實だつた。「遠航の船の生活位愉快なものはない。」と、籠を出た小鳥の樣に得意だつた。印度洋上行方も知らず飛ぶ雲を自分の身の樣に慕ひもした。熱帶の星靑き夜に、乞はるゝ儘に希臘神話を長々と語る程に長閑な氣持にもなつた。あの美しき晩を如何にして忘れよう。私は、航海中に藝術を身一ぱいに受入れられる氣持になつて居たのだ。そしてこゝへ來ると、レオナルドが待つて居た。もう是で確かだと思ふ。しかし何が確かなのか解らない。あゝ樂しいことだ。又恐しいことだ。此の「岩窟のマドンナ」は、私の見

バイロン　英國の詩人　Byron (1788–1824)

マドンナ　繪畫又は彫刻に表はされた聖母　Madonna

た最初のレオナルドで、これは日本に居た時最も傑出した作と見做したレオナルドの作ではなかつた。モナリサに逢ひに行く時はどんなだらう。瑞西を越えて伊太利へ入つてミラノに「最後の晩餐」を訪ねて行く時はどんなだらう。サンタ、アンナはどんなだらう。アンナの素描はどんなだらう。謙遜なすなほな心を持つて、神聖なものであるかの如く近づいて行かう。私は調べに來たのだ。巡禮者だ。（太陽を慕ふ者）

最後の晩餐　レオナルド一代の傑作ミラノに居た三十何歳のころの作基督が「汝等のうちに一人吾を賣る者あり」と告げられた時の弟子たちの驚き惑へる有樣が描いてある

サンタ、アンナ　Anna　レオナルド晩年の作　Santa

姉崎正治
宗教學者東京帝國大學教授。文學博士

二光あれ

姉崎正治

一般に、人間は此の世界に慣れすぎた。何物も今ある如く昔から存し、萬事總べて成行のまゝに現れ來るとして敢へて怪まないで、其の日其

の日を過す。兒童は世界新來の客として、驚異の眼を見張つて事々に疑問を起し、何物に對しても起原或は聯絡の説明を求めるが、それも徐々と世に慣れ、漸次に説明をつけて、終には疑をも起さず、好奇心をも動かさなくなる。然るに若し人あつて、俄に此の世に生れ而かも成熟した心を以て四圍の世界を觀、人生の事を考へたならば、世界の一事一物、皆驚嘆の種となり、疑問を起させるに違ひない。

姉崎正治

かくの如き疑問に對して、今日の科學はそれ〴〵説明を與へはするが、さて萬事萬物の究竟起原となれば、無始無終といふか、或は進化として説明しても、其の至極の始は、終に混沌の暗に入らざるを得ない。こゝに於てか、我等の想像力は、大能の神靈が世界を創造する始めといふ事を想はしめる。ユダヤの神話、創世記の開卷は此の想像を述べて曰く、

ユダヤ Judea

始めに神、天地を造り給へり。地は形なくして空しく、暗、淵の面にあり。神の靈、水の面を覆ひたりき。

萬事混沌として、天地は一の暗の中に閉ぢられ、水とも雲とも分らぬ濛氣が全宇宙を籠めて居た。そこへ、暗の中に、

神、光あれと宣ひければ、光ありき。神は、光と暗とを分ち給へり。夕あり、朝あり、これ首の日なり。

考へて見れば、人間の想像に上りし言葉の力にて、此の一言ほど有力に又不思議なる言葉が、他にあらうか。一言で常闇の天地に光明が生じ未來億萬年に亘るべき日夜の分ちが出來た。それから續いて、神が水あれと云へば、水を生じ、天の大空と地の大海とが、二つに分れ、又神が土といひ、青草といひ、鳥を呼び、獸を呼べば、一切萬物が、其の聲に從つて生ずる。斯の如くにして天地と萬物が成立つたと云ふ。

これは神話であり、想像である。從つて、萬物成立の説明トしては、我々

の理性には合はない。しかし、理性的説明のみが唯一の解釋であるとは限らない。又宇宙の始めのみを「光あれ」の言におこつたとすべきではない、創造・創作の實は、我々の生活に於て眼前日々夜々に經驗し得る事ではなからうか、

人の心は、物に引かれ、事に動かされ、四圍と共に變じ、事情に隨つて推移して止まる所を知らず、見る物、聞く事、一として全然自分で支配し得る事はなく、其の上、思ふ事欲する所も、變轉に加へて突發衝動、依つて來る所を知らず、落ち着く先も自分ながらに測り得ない。意馬は走馬燈と出沒し、心猿は制御するに由もない。若し自然に任せるならば、我等の心は亂雜・變轉の世界に彷徨する外なく、唯一瞬現在の意識は明かでも、其の前後左右は混沌の大冥に沒する外ない。然るにそこに何か心を統御するに足る觀念が浮び、又は精神の底に徹透する靈感に接し、或は一生を支配すべき理想を體得すれば、混沌の闇は觀念理想の光明に破

られ、精神の世界は靈の朝ぼらけに、鳥歌ひ花咲ふ天地となる。此の如き精神の靈感は、聲こそなけれ、實に「光あれ」の天籟にも比すべき創造力を發揮して、今まで意馬・心猿の跳梁に委した混沌は、光あり、力あり、一貫の命ある宇宙コスモスとなる。かく觀じ來れば、創世記の空想は、單に世界萬物の始めを說いたものでなく、刹那々々の我等の心にも起るべき大創造を描き、啻に天上の神靈が獨占するといふ創造力の事のみならず、實に我々各個の心靈が發揮し得べき原造の事實を示したものではないか。

浮世の紛々に心亂れ氣濁つた時、我が心に斯くすべしといふ決斷を得た時、これ世務の混沌を照す光ではないか。天然萬象を研究して、難題疑問の中に針路を失つて、五里霧中に彷徨する場合、一條の理路を發見し、快刀亂麻を斷つて、眞理の光明に逢着するも亦、「光あれ」の不思議であるまいか。若しくは又、藝術家が天然・人事の中に美の靈を捕へ得て畫

布の上に、又は石塊の面にこれを表現する時、其の創意には「光あれ」の創造力を具へる。音樂家が天來の音に心耳を澄して、これを樂譜に捕へるのも、詩人が感興・靈感を歌ひ出すのも、悉く皆「光あれ」の一聲、混沌の世界を破るに等しいものがあらう。

精神の創造力、これはいつまでも正體の捕はれない不思議であるが、而も亦實に人生に於ける高く貴くゆかしい生命の源泉である。萬物の生々を貫いて生命あり、世事の紛々を超えて光明ある人生の眞味、人間の眞價値は、一に此の創造力の賜ではないか。特に信念生活の力は、紛擾多端・罪障重疊の人生に、直入の一路を開き、智慧の光で無明の闇を破り、慈悲の溫みに煩惱の氷も解かす。攝取の光明といひ、救ひの恩寵といふも、一に此の小我が宇宙の大神靈と感應道交して、混沌の中に「光あれ」の御言に接する經驗を指すに外ならぬ。

思へば、人生始まつて以來、無常の世事を超えて常住の光明に接し、破綻

百出の人生に、一貫の理想を發見し、五十年蜉蝣の此の生にも、永遠の生命を實にし得た人、其の信念開發の大事に際して、混冥の中に「光あれ」の言に接した思をなさなかつた者、果して幾人ぞ。宗教の力はこゝにあり、人生の價値は實に此の如き光明の新生命が齎らす賜である。大死一番を經た大悟徹底、悲痛煩悶の底に陷つた後の信心開發、罪を悔いて罪の己を殺し得た精神の復活蘇生、言葉は異なり、方面は違つても、混沌を破る新光明を得たといふ靈の感化に至つては一つであらう。

「光あれ」、これ單に太初の創世に限らぬ。人生美はしきものあり、眞理に順ふ生活あり、理想の力が現れる處には、「光あれ」の御言が常にきこえ、其の不思議の創造力が、絶えず躍動しつゝあるのである。（光あれ）

三夢殿

大倭の長閑な夢を破つた大陸文化の大潮は、信貴の山裾に法の霞をたなびかせ、立田の川面に朱の楹を映して、若草の萌え出づる樣な文明の力に潑剌たる精采を放つたのであつた。

その完成者は聖德太子であつた。太子は佛法を以て國を敎化し、伽藍を以て都を嚴飾し、そしてそれを旗幟として、大倭を科學の國・文化の國・藝術の國に改造されたのであつた。寧樂が文明の薰に飽和し、朱欄・丹楹の光彩に輝き渡つた事は、只管、聖德太子の餘榮による事であつた。

行信・聖武天皇ごろの高僧・法隆寺の伽藍の完成者

法隆寺の僧行信は、日夜、聖德太子の營まれた藝術の懷に起居して、薄明りの內陣に藥師三尊のなだらかな御姿を拜む度ごとに、黃昏の空に光る五重の塔の九輪を仰ぐ度毎に、太子を敬慕する念慮は、淨い心に濃く

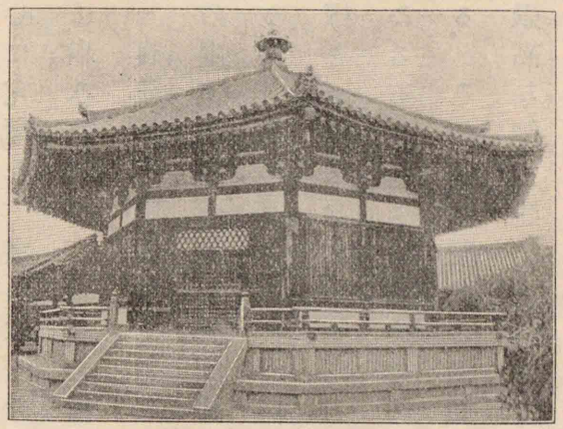
鋭く鬱積して行つたのであつた。聖德太子に對する隨喜渴仰は、やがて行信には狂ほしく惱ましいものになつて來た。行信は、太子を偲ぶ心に亢奮して堪らなくなつて來ると、東大門を拔け出でて斑鳩の宮址に歩みを運んで、飛鳥の世を追想する樣になつた。

三寶興隆の策源地であつた聖德太子の斑鳩の宮址は、華やかな御治蹟の追憶の繪卷物を繰擴げるのにふさはしい樣にと傷ましく荒果てゝゐた。その草の上に寢轉ぶと、勾配の快く急速な屋根と、極めて緩い屋根とがかさなり合つてゐる金堂と、五つの屋根が旋律的につりあつてゐる五重塔との法隆寺のスカイラインが、おほらかに眼の前に浮び出る。

スカイライン・sky-line

その犍陀羅風の諧調がゆらめき、飛鳥時代の氣分が滲み出てゐる崇高な伽藍建築を眺めては、その創建者の面影を偲ぶにつけて、いつしか行信の心には、その崇拜し、憧憬し、渴仰する偉人を、永久に記念することの考が萌え出た。「さうだ、この斑鳩の宮址こそは、太子の何よりの記

念の場所だ。そして、美しい建築こそは、太子にふさはしい記念物だ。太子に依つて拓かれた寧樂朝文化の精を凝した純藝術的な殿堂を營んで、太子の夢を安らかに護り、太子の德を永久に傳へ、その意義ある象徴によつて、大倭の美術を大陸に誇りたいものである。



法隆寺夢殿

行信は遂にかう決心をして、それから只管太子の德を宣傳し、記念殿堂建立の意義を上下に鼓吹し、その實現に奔走したのであつた。天平十一年、行信のこの熱烈な希望は滿たされて、藤原不比等の統裁の下に、勅を奉じて記念殿堂の工を起す機運に際會した。そこで行信は猪名部の工匠どもに依つて、八角形の夢殿を中心に、禮堂・舍利堂・繪殿を前後に

配置し、廻廊で取り廻した法隆寺東院の設計を立て、そして工事にいそしんだのであつた。

石壇の上に高欄を廻らして建立する夢殿は、丹塗の柱、白堊の壁の眼ざめる樣な交錯。雄渾な舟形肘木と力强い一軒でどつしりと支へられた傾斜の緩い、軒先の深い、碧瓦の屋根に、蠱惑に充ちた寶珠・露盤を戴いて、その名に背かない、春の夢の樣な空間藝術であつた。

三寶興隆、佛寺建造の建築技術黃金時代に際會して、思ひの儘に腕を鍛へ、技を磨き、想を練つて、建築史上の所謂天平時代の爛熟期を劃した當時の工匠たちは、伎倆と感覺とに驕つた手練をたのんで、行信の燃える樣な憧憬を遺憾なく斑鳩の宮址に體現し、崇高なる聖德太子の全人格を餘蘊なく一宇の堂に表現して、朱の都の寧樂の一角に、寶玉の樣な光彩を點じたのであつた。

深紅の扉の裡、仄かに輝く金飾の厨子の奥深くには、簡素な推古佛の救世觀世音の一體が、魂の様に固く嚴かに祕められたのであつた。

（大阪朝日新聞）

四　病牀六尺

正岡子規

正岡子規
名は常規
俳人
歌人
新聞記者
伊豫松山生
明治三十五年歿
年三十六

正岡子規

病牀に寢て身動きの出來る間は敢へて病氣を辛いとも思はず、平氣で寢轉んで居つたが、此の頃のやうに、身動きが出來なくなつては、精神の煩悶を起して、殆ど毎日氣違のやうな苦みをする。此の苦みを受けまいと思つて、色々に工夫して、或は動かぬ體を無理に動かして見る。愈、煩悶する。

頭がむしや〳〵となる。もばやたまらんので、こらへにこらへた袋の緒は切れて、遂に破裂する。もうかうなると駄目である。絶叫。號泣。益、絶叫する。益、號泣する。その苦その痛何とも形容することは出來ない。寧ろ眞の狂人となつてしまへば樂であらうと思ふけれど、それも出來ぬ。若し死ぬことが出來ればそれは何よりも望むところである、しかし死ぬことも出來ねば殺してくれるものもない。一日の苦みは夜に入つてやう〳〵減じ、僅かに眠けさした時には其の日の苦痛が終ると共にはや翌朝寐起の苦痛が思ひやられる。寐起程苦しい時はないのである。誰かこの苦みを助けてくれるものはあるまいか、誰かこの苦みを助けてくれるものはあるまいか。（二十日）

二十日
明治三十五年六月二十日
この年の九月十九日子規は歿した

「如何にして日を暮すべき。」「誰か此の苦を救つてくれる者はあるまいか。」爰に到つて宗教問題に到着したと宗教家はいふであらう。併し宗教を信ぜぬ予には宗教も何の役にも立たない。基督教を信ぜぬ者

には神の救の手は固かない。佛教を信ぜぬ者は南無阿彌陀佛を繰返して日を暮すことも出來ない。或は畫本を見て苦痛を紛らかしたこともある。併し如何に面白い畫本でも毎日々々同じ物を繰返して見たのでは、十日もたゝぬうちに最早陳腐になつて再び苦痛をまぎらかす種にもならない。或は雙眼寫眞を弄んで日を暮したこともある。それも毎日見ては段々に面白みが減じて、後に頭の痛む時など却て頭を痛める料になる。何よりも嬉しきは親切なる友達の看護してくれることであるが、それも屢、出逢つては別に新しい話もないので、病人も看護人も兩方が差向つて、一はたゞ苦しみ、一は其の苦みを見て心に苦しむやうになる。去年頃までは唯一の樂みとして居つた飲食の慾も、今は殆ど消え去つたのみならず、飲食其の物が却て身體を煩はして、それがために晝夜もがき苦しむことは、近來珍しからぬ事實となつて來た。或は謠を聞き或は義太夫を聞いて樂しんだのは去年のことであ

つたが、今は軍談師を呼んで來ようか、活動寫眞をやらして見ようかとの友達の親切なる慰めは却て聞くさへも頭を痛めるやうになつた。大勢の人を集めて、これと室を共にすることも苦みの種である。謠の聲、三味線の音、遙かの遠音を聞けばこそ面白けれ、枕元近くでは其の音が頭に響き、甚だしきは我が呼吸さへ他の呼吸に支配せられて非常に苦痛を感ずる樣になつてしまつた。畢竟自分と自分の周圍と調和することが甚だ困難になつて來たのである。痲痺劑の十分に効を奏した時は此の調和が稍、容易であるが、今は痲痺劑が十分に効を奏することが出來なくなつた。予は實にかやうな境界に陷つて居るのである。いつ見ても同じ病苦談、聞く人には馬鹿々々しくうるさいであらうが、苦しいといふより外に仕方もなき凡夫の病苦談「如何に日を暮すべきか。」「誰かこの苦を救つてくれる者はあるまいか。」情ある人我が病牀に來て予に珍しき話など聞かさんとならば、謹んで予は爲に多少の苦を

救はるゝことを謝するであらう。予に珍しき話とは必ずしも俳句談にあらず、文學談にあらず、宗教・美術・理化・農藝、百般の話は知識なき予に取つて悉く興味を感ぜぬものはない。たゞ斷つて置くのは差向つて坐りながら何も話のない人である。（二十一日）

今朝起きると一封の手紙を受取つた、それは本郷の某氏といふ、余の知らぬ人より來たのである。其の手紙は大略左の通りである。

拜啓。昨日貴君の病牀六尺を讀み感ずる所あり。左の數言を呈し候。

第一、かゝる場合には天帝又は如來と共にあることを信じて安んずべし。

第二、もし右を信ずること能はずとならば、人力の及ばざるところを悟りてたゞ現狀に安んぜよ。現狀の進行に任せよ。痛みをして痛ましめよ。大化のなすが儘に任せよ。天地萬物わが前に出沒隱見

するに任せよ。

第三、もし右二者共に能はずとならば、涕泣せよ、煩悶せよ、困頓せよ、而して死に至らんのみ。

小生は嘗て瀕死の境にあり、肉體の煩悶・困頓を免れざりしも右第二の工夫によりて精神の安靜を得たり。これ小生の宗教的救濟なりき。知らず、貴君の苦痛を救濟し得るや否やを。敢へて請ふ、病間あらば一考あれ。（以下略）

此の親切なる且明瞭平易なる手紙は甚だ余の心を獲たものであつて、余の考も殆ど此の手紙の中に盡きて居る。唯余に在つては精神の煩悶といふのも、生死出離の大問題ではない。病氣が身體を衰弱せしめた爲であるか、脊髓系を侵されて居る爲であるか、とにかく生理的に精神の煩悶を來すのであつて、苦しい時には、何とも彼とも致し樣の無い譯である。併し生理的に煩悶するとても、其の煩悶を免れる手段は固

より「現狀の進行に任せる」より外は無いのである。號泣し煩悶して死に至るより外に仕方の無いのである。たとへ他人の苦が八分で自分の苦が十分であるとしても、他人も自分も一樣に諦めるといふより外に諦め方はない。此の十分の苦が更に進んで十二分の苦痛を受くる樣になつたとしても、やはり諦めるより外はないのである。けれどもそれが肉體の苦である上は、程度の輕い時はたとへ諦めることが出來ないでも、慰める手段がない事もない。程度の進んだ苦に至つては、啻に慰めることの出來ないのみならず、諦めて居ても尙諦めがつかぬやうな氣がする。蓋しそれはやはり諦めのつかぬのであらう。笑へ。笑へ。健康なる人は笑へ。病氣を知らぬ人は笑へ。幸福なる人は笑へ。達者の兩脚を持ちながら車に乘るやうな人は笑へ。自分の後ろから巡査のついて來るのを知らず路に落ちてゐる財布をくすねんとするやうな人は笑へ。年が年中晝も夜も寢床に横たはつて、三尺の盆

栽さへ常に目より上に見上げて樂しんで居るやうな自分ですら、痲痺劑のお蔭で多少の苦痛を減じて居る時は、煩悶して居つた時の自分を笑つてやりたくなる。實に病人は愚なものである。これは余自身が愚なばかりでなく一般人間の通有性である。笑ふ時の余も、笑はるゝ時の余も同一の人間であるといふ事を知つたならば、余が煩悶を笑ふ所の人も、一朝地を換ふれば、皆余に笑はるゝの人たるを免れないだらう。咄々大笑。（廿三日）（子規隨筆）

五　薔薇の芽

正岡子規

くれなゐの二尺伸びたる薔薇の芽の針やはらかに
春の雨降る。

瓶にさす藤の花ぶさみじかければ、疊の上にとゞかざりけり。

病み臥せるわが枕べに運びくる鉢の牡丹の花ゆれやまず。

緣先に玉卷く芭蕉、玉解けて五尺のみどり手水鉢を掩ふ。

庭中の松の葉におく白露の今か落ちんと見れども落ちず。

小庇にかくれて月の見えざるを一目を見んとゐざれど見えず。

冬ごもる病の床のガラス戸の疊ぬぐへば、足袋ほせる見ゆ。

木のもとに臥せるほとけをうちかこみ、象蛇どもの

泣き居るところ。

武藏野の冬枯芒、婆々に化けず梟に化けて人に賣られけり。

水莖のふりにし筆の跡見れば、いにしへ人はよく書かれたり。

六 運命の丘

島村抱月

第一場

モスコー市の西南、雀が丘の一部、丘の頂を舞臺の前面に現して、背後は一面にモスコーの市街を見おろした景色、秋日和の午後二時過の日光が強くモスコー河に反射してゐる。

市内すべて本文にある通りの景。

島村抱月
名は瀧太郎
文學者
早稻田大學
教授
大正七年歿
年四十八

登場人物
ナポレオン
四十四歳

ダリュー　五十歳
ミュラー　四十二歳
モルチエール　四十五歳
アンドレー　三十歳
韃靼人二人
將校下士從卒其の他

場所　モスコー市外

時代　一八一二年九月十四日の午後

クレムリン　モスコー市の中心で丘の上に城壁を繞らし宮殿や寺院が多くある Kremlin

軍服のナポレオン、馬を麓に乘り捨てた氣持で、數歩先に立ち、つか〳〵と小急ぎに下手から丘の頂に現れる。續いてダリュー！モルチエール・アンドレー及び三四の將校從卒等登場。（ナポレオン、モスコーの市街を見るや否や）

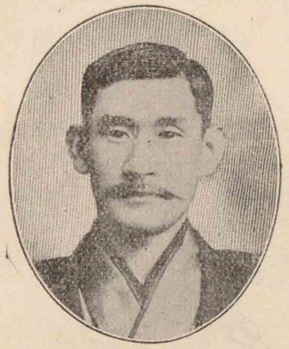
ナポレオン　モスコー！　モスコー！

（叫んで尙熱心に向ふを見てゐる）

ダリュー　モスコーだ！　モスコーだ！

（他の人々も之に和して競うて市街の方を見る）

ダリュー　そら見給へ、あれがモスコー河だ。其の向ふがクレムリンさ。丸の内だ、綺麗ぢやないか。



島村抱月

モルチエール　なる程こりや綺麗だ。まるで古い繪本が拔け出したやうな町だな。

ダリュー　あの建物を見給へ。木造だらう。塗つた屋根や壁の色も違つ

てるね。東洋的ぢやないか。其の前を、まるで灰色の熊が馬に乘つたやうなコサックめが、大槍を横たへて通る所は似合つてるな。配合がいゝぢやないか。

アンドレー　北國に似合はん明るい町ですね。空氣も實に澄んでる、たしかに神聖な町といふ感じがしますね。

モルチエール　眩しいやうだ。金の十字架が、まるで星を散らしたやうに光つてゐるぢやないか。あれがみんな寺だらうか。寺の多い處だな。外部も內部も、見給へ、町の半分は寺だが。尖塔がまるで雜木林のやうに並んでる。其の一本々々に金の星がかゝつてゐるのだ。

アンドレー　寺院ばかしが三百近いでせう。それから處々新月の徽章も光つてゐます。マホメダンの寺でせう。かうなると壯觀ですね。十字の星と新月が此の古い空に撒いたやうに浮んでる。これだけでも胸が躍りますね。あれが此の町の命なのだ。命のシムボルが

マホメダン　Mahomedan

シムボル　Symbol

あゝして光つてるのだ。平和ですね。つい、そこいらまで煙硝の煙で重くなつてゐた空氣が、此處へ來ると水晶を裁ち切つたやうに澄んでゐる。其の中に強い色を塗り立てた屋根や壁が品を作つてる所は、なるほど女性的ですね。ロシヤ人は此の町をおつかさんと言ふさうだが、私等には美しい尼さんといふ感じですね。

モルチエール　處々隨分大きな庭がある。人家の間に森を切つて撒き散らしたやうな處だ。どうしても繪本だ。これが本當にモスコーなのかなあ。夢のやうだ。

（飽かず市街を見てゐたナポレオンは此の時始めてこちらを向き近くに立つて居るモルチエールの肩を輕く叩いて）

ナポレオン　おい！

モルチエール　はつ！

（皆一齊に其の方を向く）

ナポレオン　モスコーへ來たんだよ。氣をたしかに持たなくちやいかんよ。

モルチエール　陛下、夢のやうでございますなあ。

ナポレオン　夢ぢやない。本當のモスコーへ來たのだ。到頭來たのだよ。

ダリユー　夢が事實になつたのですね。

ナポレオン　お前にも似合はん事を言ふね。初めから事實さ。夢が何で事實になるものか。俺がパリーでセルギュール伯に言つて聞かせたのはそこさ。俺には初めからモスコーは目に見えて居た。必ず來られるものと云ふ確信があつたのだ。確信は運命だ。運命は事實だ。

ダリユー　陛下の筆法によりますと、モスコーは陛下の運命でございますね。

ナポレオン　運命だ、全く運命だ。俺には是非とも一度此のザールの城へ

ザール　ロシヤの皇帝の稱 Czar

來なくちやならん運命があつたと思ふ。モスコーは私の憧憬だ。古い古い前世からの憧憬であつたのだ。さつき一目見た時に私はすぐさう思つた。今までこの懷かしいものを人手に委せて置いたのが妬ましいやうだ。

モルチエール　早く陛下をクレムリンへ御供したいものだな。

アンドレー　ミロラドヴィッチ少將が歸つてから、かれこれ二時間近くなりませう。もう、町の使節が來てもよい時刻ですね。あゝ御覽なさい、今やつと敵軍の後衛が町を出はづれました。あの森の蔭に續いてるのがそれです。あれでクツーゾフ元帥の率ゐて居られる九萬がすつかり退却した譯です。

ダリユー　やあ、ミュラー將軍が市街の入口で盛んに歡迎せられてゐるぞ。貧民どもが珍しさうに集つて來るぢやないか。まるで觀せ物扱だ。

ナポレオン　クレムリン！　響のいゝ言葉だ。あの邊が宮城だらうな。

おい！　地圖を見せないか。

（アンドレー、市街の地圖を披いて捧げる。ナポレオン手に取つて見て）

ふん。（顏を上げ、また市街を見入つて）

あれだ。クレムリン、クレムリン。俺はあの宮中の繪を見た事がある。あの大きなサロンには、さう〳〵、イタリヤから磨かせて來た大きな大理石の柱があつた。あの前にアレキサンドルと后（きさき）とが並んで腰をかけて居た。あのアレキサンドルの神經質らしい顏は、決して憎い顏ぢやない。私の兄弟にして、つき合つてやりたいと思つた。

（直立して凝視してゐた將校等互に顏を見合せる。ナポレオン顧みて）

ねえ、さうだらう？　全くルッスは憎くない國民だと思はないか。

俺は好きだよ、俺は。

モルチエール　全く憎さげの無い國民でございますな。のろつとして居て、素直で、勇敢で。

サロン　客室　Salon

ルッス　ロシヤ人　Russ　Russian

ダリユー　いや、我々の脈管に流れてゐる血が同じケルトの源だから……

アンドレー　それもさうでせうが、一方から言ふと違つてるから相引くのかも知れません。異性相引く道理ですね。永い間つめたい外部の壓迫で、反抗的に沸いた彼等の血は、永久に熱いのです。處が、自然が溫めてくれた我々の血は冷熱が早い。僕はむしろ僕が西南の人であるといふ理由で、此の東北の神祕な國民を慕ひたいと思ひます。

ケルト Celt ケルト人種

モルチエール　はゝ、君の言ふ事は、あんまり感に入り過ぎていかんよ。第一我々は征服者だぜ。強きものが弱きものを愛する關係だぜ、忘れちやいかん。

アンドレー　ですが、愛は強い弱いの關係ではありません。

モルチエール　はゝ、生意氣を言ふなよ。

ダリユー　まあいゝさ。若いからな。戰をしながら愛を論ずる筆法だらう。ねえ、君。

（ナポレオンは地圖を卷いて手に持つたまゝ、そこらを往つたり來たりして居たが、寄つて來て）

ナポレオン　まだ來ないか。遲いぢやないか。

モルチエール　もう來さうなものでございますね。おい君、一つ偵察にやつてくれ。

アンドレー　は。

（下手へ行つて何か命ずると、一人の士官急ぎ足に降り去る）

ダリユー　陛下はお疲れであらうから、そこらへ假りに何したらどうだらう。

ナポレオン　要らん／＼。俺の顏に疲れが見えるか。

ダリユー　いや、お顏色は却て益、活氣を帶びて參るやうでございますが、なにしても一週間以來のお疲れでございますから。

ナポレオン　俺には疲勞と云ふ事はない。此の眼の輝くのは、それ、運命が

眼の前に來たからさ。此の晴れた空に、此の壯麗な景色を見て、興奮せずに居られるか。ダリューなぞも顏色が違つて來たぜ。ついさつきまで君等の顏にはボロディノの影が粘りついてゐた。死の影がついてゐた。それが今ぢやモスコーの影が反射してゐる。生の影だ。みんなの眼が躍つて居る。今にクレムリンの城へ這入つたら、君等は一番がけに何をするだらう。モルチェールは何が欲しいか。

ボロディノ　モスコーの西七十哩にある村　Borodino　ナポレオンがモスコーへ入る一週間前九月七日露軍と劇戰して大勝を得た處

モルチエール　久し振りで良い葡萄酒でも御馳走になりませうかな。

アンドレー　私は先づ靜かな部屋に引つ込んで、この興奮の心の褪せないうちに日記をつけたいものでございます。

ダリユー　私もそれに贊成。

ナポレオン　さう〳〵、ダリューは歷史家で詩人だつたな。

ダリユー　「だつたな」は恐れ入りました。

ナポレオン　忘れてゐたのだよ。

ダリユー　忘れられて少しも恨みはございませんな。私なぞは新世紀の上にさしかけてゐる十八世紀の影のやうなものですから。

ナポレオン　はゝ、悟つたね。

ダリユー　却て此のアンドレー君などが十九世紀の若い息を呼吸してゐて、自然と詩人になつてゐます。

ナポレオン　ふん。若い者の時代か。俺なぞは、ダリュー、どちらの組か。若い方か、古い方か。

ダリユー　さやう……陛下は勿論私なぞよりも若くて入らせられるし、國家の上では新しい時代を代表せらるゝのでございませう。

ナポレオン　其の譯は？

ダリユー　さやう……十八世紀の纖弱なつめたい文明に對して、強い勢力の要求が陛下の御體に權化したと申したら、如何でせうか。

ナポレオン　ふん。併し其の力は何處から來るだらう。私に言はすれば運命だ、運命！　力はそこから來る。若し私が十九世紀の時代を暗示するとしたら、私は運命の權化だと言つて貰ひたい。

アンドレー　（進み出で）陛下、陛下。私は唯今の瞬間に於て、陛下に神仙の如き高風を感じます。運命の權化！　何と言ふ深いお言葉でございませう。手が此の通り感激に顫へて居ります。どうか握手を願ひたうございます。

ナポレオン　よし、よし。

（微笑しながら固く握手する。其の途端に市街の方で爆發の音が一つする。皆々愕然として其の方を向く。ナポレオン俄に正氣づいたやうにきつとなる）

モルチエール　あれだ、あれだ。外郭に接した東の處に煙が上つてゐる。何事だらう。うん。騎兵が這入つて行くやうだから、今に分るだらう。こりや長く斯うして居るのは危險かも知れんよ。使節はどうしたのだらう、どうして遲いのだらう。

（一同無言で、待遠しい樣子に市街の方を見る。ナポレオン此方を向いて）

ナポレオン　今に來る。きつと來るよ。さつきの報告はまだか。もう一度偵察にやつて見い。

アンドレー　は。

（再び下手へ行つて令を傳へる）

ダリユー　町が段々靜かになつて來るやうに感ずるが、うそかねえ。動く光線や活きた音波の刺戟といふものが、まるでなくなつたやうな感じがする。見たまへ、馬鹿に森として來たぢやないか、河の瀨の音が聞える。

モルチエール　はゝ、生の町がまた死の町になつたかな。モスコーがボロディノになるのかな。

ナポレオン　（モルチエールの方へ鋭い一瞥を投げて）

馬鹿つ！

モルチエール　（姿勢を正してナポレオンの方へ向き）

陛下お氣に觸りましたら御免下さいませ。併し私は飽くまでも戰地といふことを忘れたくはないと思ひます。モスコーに何時敵軍が現れても驚かない覺悟はして居たいと思ひます。私は今以てまだ確實にモスコーを占領したとは思つて居りません。

（ナポレオン無言のまゝ往つたり來たりしてゐる。皆々無言。一同の胸に一種の氣まづい心持が流れ込む。しばらくして）

ナポレオン　分つたよ、分つたよ、しかし私はもう確實にモスコーを占領したつもりで居るね。さつきからクレムリンの宮城で、大夜會をひらく手筈まで考へて居る。二百九十五寺と言ふ夥しい寺の坊主どもを集めて諭してやらうと、其の演說の腹案まで拵へた。寺の建物には殘らず大きな字でMaison de ma mere（メイソン、ド、マ、メール）と彫りつけさせてやらうと考

Maison de ma mere　フランス語で我が母の家といふ意味

へた。此のモスコーには、お前等のうち誰を總督にしようかとそんなことまで考へてゐる。モスコー占領！　もう動かん事實だ。夢ぢやない。

（言つてじつと市街の方を見おろして立つてゐる。皆々同じ方を見て無言。このとき一同の胸に一種の不安が萌す心持。やがてナポレオンはそこらを歩きはじめる）

ダリユー　もう何時だらう？　日があんな方へ行つたね。どうだらう、兵をやつてロストプチン總督を連れて來させては。

モルチエール　どうもそれがよくは無いかな。暗くなると面倒だぞ。さつきの爆聲が何か意味があるのぢやなからうか。

（ナポレオンはまた市街の方を見て沈默してゐる。日影が薄くなつて、處々の庭木の森が黑んで來る。間を置いて）

アンドレー　あゝ、來た、來た！　報告を持つて來た。

（騎兵一人飛びおりて、アンドレーの前に直立し、封書箱を渡す。手早く開いて）

アンドレー　あゝ、これはさつきの爆聲に關聯した事です。

（急いで讀む内に顔の色がかはる）これは怪しからん。大事件でございます。

（皆々驚いて聞耳を立てる。ナポレオンも無言で立つて聞いてゐる）

ロストプチン總督が囚徒を悉く解放した樣子で、其の一人が爆發に關して我が軍に捕縛せられました。場所はドロゴミロフの門に近い市街の空家で、爆發の原因等は不明、出火にはならなかつたが、附近で擧動不審な一人の韃靼人を捕縛したのださうでございます。

モルチエール　其の韃靼人を調べて見たのか。

アンドレー　取調べたが更に口を開かないとあります。

モルチエール　そりや容易ならん事だ。すぐ市街を警戒しなくちやいくまい。

アンドレー　勿論やつてるやうです。

モルチエール　それから其の捕縛した韃靼人は連れて來たのか。居るなら、

すぐ此處へ連れて來いつて。通譯を附けてな。

ナポレオン　なあに心配するには及ばない。大勢はもう極つてゐる。この運命は動くものぢやない。そいつは追つ放してやれ。

モルチエール　でございますが。此の際注意しませんと……

ナポレオン　いゝさ、いゝさ。それは何か偶然爆發したんだらうよ。偶然の事だ、恐るゝに足らん。

（立つてゐる騎兵に向つて）

さう言つて行け。

（騎兵敬禮をして引きかへす）

それよりか、一方の樣子はどうだ。一向に報告が來んぢやないか。誰か此の内で行つて見い。

アンドレー　私が參りませう。

（敬禮をして行かうとする時第二の傳令來る）

アンドレー　おゝ、報告か。

（下手へ急ぎ足に行くと、馬から飛びおりた士官、あわてた樣子で、聲を潛めて話す。アンドレーの顏色また〳〵かはる。他の二人も寄つて來て報告を聞き、顏を見合す。ちよつと密語をしてナポレオンの方を振り向くと、立つて鋭く皆の方を見てゐたナポレオンの眼と見合つて、あわてゝ他を振り向く。同時にアンドレーがつか〳〵と群を離れて進み寄り、顫へた聲で）

アンドレー　陛下！　モスコーは空虛でございます！

ナポレオン　えゝ？　モスコーが空虛？

アンドレー　はい空虛でございます。

（ナポレオンは聞くと同時にアンドレーの上に投げた鋭い眼光を市街の方へ轉じて、無言のまゝじつと見てゐる。顏の色變る。アンドレー其の他皆々佇立したまゝ、一齊にナポレオンの横顏を見つめて、身動きせず、しばらくの間、森として聲無き氣持）

ナポレオン　馬車を持つて來い。

（士官の一人走り去ると、跡からナポレオン大股につか〳〵と丘を下手に降りる。皆々沈

默のまゝ、續いて降り去る。丘の上には夕日が淋しく薄れて殘る）

——幕——

第二場

モスコー市の一方の入口たるドロゴミロフの見附が夕日を負うて遠見に立つてゐる。路傍の土手上の景。

髪も髯も蓬々と伸び垢まびれの顏の蒼白く窶れた韃靼人二人、土手に腰をかけ、下の路からかけて向ふの方を眺めてゐる體で幕あがる。

甲　一體どうしたと言ふんだ。馬鹿に騷ぎ出したぢやないか。

乙　町へ這入つて來ると言ふんだらうよ。

甲　それにしてもお前をよく放免しやがつたなあ。よつぽど言ひ拔けがうまかつたと見えるな。

乙　俺（おいら）は言ひ拔けなんかしやしねえ。たゞ言葉は一切韃靼語のほかは分りませんといふ風をして默つて居たゞけさ。なあに、俺の體はど

うせもう、持て餘してる體だあな。殺さうが活さうが、悲しくもなけりや、嬉しくもねえ。總督さんに賴まれたから、火だけはつけてやるが、つけねえかも知れねえ。どつちだつていゝ事だ。だつてお前、おんなじロシヤ人だな。賴まれた以上は……

（向ふを見て）

あゝ、通る〳〵。あれがナポレオンだらう。來ねえ〳〵。行つて見ようよ。

（甲が乙を引つ張るやうにして後へ降りる）舞臺廻。

第三場

ドロゴミロフの見附前、夕暮の光景。門の兩側に數人の衞兵が立つてゐる。路を離れて前場の韃靼人二人及び貧民體のもの三四人まばらに立つて見てゐる。ナポレオンは馬車を降り、徒歩で第一場の人々を從へ、ミュラーに先導せられて門の前まで來る。

ミュラー　これがドロゴミロフの見附でございます。御命令で兵は總べて一足先に市街へ入れて置きました。

（ナポレオンは見附の入口でばたりと歩を止め、石門を見上げて立つてゐる。皆々一樣に立止まる。しばらく無言）

ナポレオン　もうこれでいゝ。此の門さへ見れば、私は滿足だ。今夜は私は引きかへして此の村へ泊らう。ミュラーは市街の方を氣をつけい。

（言つてすた〳〵と跡へ歸らうとする。皆々驚く。ミュラー急いで前に立ちふさがる）

ミュラー　陛下、それはまたどうした譯でございます。こゝまでお出でになつて、引つかへすと仰しやるのは意を得ません。縱へ市民は遁走しても市街と宮殿とは殘つて居ります。陛下、これが此の大戰爭の目的地たるモスコーの町でございます。是非お這入りを願ひます。申すまでもなく危險は少しもございません。ミュラーが身を以て

お守り申して居ります。危險をお恐れになる陛下ではない。此處からお引つかへしになるといふ法は斷じてございません。

（ナポレオン再び門の方を向いて、見上げたまゝ、默して答へず）

モルチエール　ちよつとでも、クレムリンの宮殿へ陛下がお這りになれば、一般の士氣が振ひます。

アンドレー　陛下はモスコーの町に這入るのが運命だと仰せられたでございませんか。其の通りになつて參つたのです。躊躇なさる理由はございません。

（熱心に進み寄つて）

運命！　運命！　陛下、運命の門はこゝに開いて居ります。たゞ一足です。クレムリンの門も開いて居ります。我等フランス人の手で明けて待つて居ります。あれ程待ち焦れてお出でになつたモスコーへ來たのでございませんか。陛下は運命の權化だと仰しやつ

た、あの豫言が今一足で充たされます。よしロシヤ人は一人も居ないからうが、フランス人のモスコーで結構でございませんか。どうかおはひり下さい。陛下、我々がお手を取りませうか。馬車にお召しなさいますか。

ナポレオン　（じつとアンドレーの顏を見て、やゝ涙ぐみ）

運命！　運命！　運命の門！

（アンドレーの肩に兩手をかけ）

空虛　モスコー！　空虛　クレムリン！　はゝ、はゝ。

（絶望的に笑ひすてゝ、すた〳〵と門の中に這入る。皆々驚いてついて這入る。跡に衞兵も見物人も居なくなると、先程の韃靼人二人門の前に進み出で、人々のはひつた跡を見送つて）

乙　運命の門だとよ。

甲　はひつて行つちやつた。

六　運命の丘

乙　は、は。

（乙が氣の無い笑ひを一聲したまゝ、二人とも口を明き、窪んだ眼を一杯に見ひらいて、無意味に門を見て居る。日が暮れて行く）

――幕――

（抱月全集）

七　輝ける野の美感

井上康文

井上康文
詩人
名は康治
明治三十年
神奈川縣小田原町生。

ゴッホ
Gogh
(1853-1890)
和蘭の畫家

緑に萌えた麥はゴッホの觸感（タッチ）、
耕作する農人は惠まれた自然兒、
熱烈な夕日に赤く輝いた野の美感にうたれて、
私の魂は恍惚としてゐる。

紫にけぶる雜木林の中からは、
優しい小鳥の囁きが聞えてくる、
強い褐色と緑の眞中に、
崇高く生ひ育つた木蓮が一本、
夢のやうに白く搖れてゐる。
風はうなりを立てゝ、
其の一切のものゝ話を媒介してゐる。
それはすばらしく靜寂な長閑な風景だ、
あらゆる一切の妥協から解放されて、
みんな清新な氣持でぢかに觸れあつてゐる。

都會から田園へ、
輝ける野に立つて、

誰か其の美感に打たれないものがあらうぞ、
誰か感激に胸を躍らせないものがあらうぞ。

あゝ、野に立つて、
美しい風景と若々しい香に包まれて、
一切の妥協から解放されて、
それに土と自分の偉大な姿を見出さう、
それがどんなに人間を元氣づけるだらう。

あゝ、輝ける野の美感にうたれて、
私の魂は恍惚としてゐる、
そして私の姿は磨かれたやうに美しい。

（明治大正詩選）

吉江喬松
文藝家
孤雁と號す
早稲田大學
教授
明治十三年
長野縣鹽尻
村に生る

自然詩人

八海潮の響

吉江喬松

吉江喬松

毎朝二階の窓から東南の空を見ると、白く光る雲が遠い杉木立の上にもや〳〵涌き出てゐるのであつた。日の光はその雲の頂を照して、いかにも輝かしいが、雲の下層は一樣に平かに途切れて、下からは青色の空が光を浮ばせ、青い光を照り返してゐる。

あの雲の下あたりが、丁度東京灣の波の上であるまいか。房州通ひの船は、あの雲を仰ぎ見ながら走つて行くのではあるまいか。そんな事を思つてゐると、四五日前、横濱埠頭で送つたアメリカ行の友人の船が見えて來る。白く塗つた天洋丸の波を蹴立てゝ行く姿が見える。大うねりを立てゝ寄せて來る大洋の波、ゆつたりとした眺め、爽かな洋上

の空氣、それを吸ひながら甲板上を歩いてゐる友人の得意の姿、――空想は空想を追うて涌く。

毎朝その白い雲を見る度に海を思ふやうになつた。風が少し強く、雲の下層が亂れて見える時は海の波が音高く、雲の下でまろんでゐる姿を思ひ浮べた。日が強く照る時、雲の姿を胸に抱き光と波と雲と皆樣樣に入り亂れて照り返してゐる華かな白銀のやうな海を思つた。

東南の空！　いつも〳〵私が憧れてゐる方向だ。海は私の思を引いて、その方向に横たはつてゐる。高照る雲白銀の海、不斷の樂の音を奏してゐる波、その雲を見る毎に私の胸には波の音が聞えて來た。

曇日か雨の日で、この雲の姿が仰がれない時は、寂しくて耐らない。頭も重くなる、やるせない思がしきりに起つて來る。氣むづかしさうに波が焦立つて、その上を渉つて行くものには、何物にでも白い齒を剝き出して、嚙みつくやうに跳りかゝる樣も見える。亂れた波の旋律、狂ほしい波涙の叫び、やがて灰色雲が一層低く垂れ下つて來ると、波と雲とが嚙合ひ始めて、その間を行く船は、雙方から嚙碎かれるのではあるまいかと思はれて來る。

がこの白く照り渡る雲の見えるのは初夏の最初の徵候で、それからの空は色濃く重々しくなつて、都會の上に臨むやうになる。柔かに氣高く光つてゐた雲が、強く厚く、一層大きく高く湧上るが、下層はいつも同じに平らかに切れて、青雲は同じ光りに輝いてゐる。波の響！　いつもと同じく雲の下層は搖れ動いてゐるやうに思はれる。

夏の夜天が次第に更けて、それも夏長けて九月の初旬頃になると、紫紺の空に星が數を增して來る。晝間見てゐる雲は夜になると何處へか消えて、只小さな形ばかりの一片の雲がその後にたゆたつてゐる。其の頃になると、いつも私の胸に浮んで來る詩の句がある。

夜深
險夷原不
レ滯二胷中一何
異ニ浮雲蔽ニ
大空一。夜深
海濤三萬
里、月明飛
レ錫下ニ天風一。
（王陽明）

「夜深海濤三萬里。」

いかにも大きな豪壯な趣を味はせる句だ。夏の夜更けに此の句を口にしながら空を仰いでゐると、どう〳〵といふ波の響が、紫紺の空に傳はつて四方に達する姿を思はずには居られない。その響は大空にまたゝいてゐる紫の星の一つ〳〵を搖がせて、高く懸つてゐる雲にも響き、月の中にも消え込み、山岳の頂までも傳はり、奥深い谿の中までも動かし、聞えて氣付かず知らずにゐる人々の胸の鼓動にも傳はつてゐるのである。豪壯な而して微妙な樂の音寒い雪の野山を響かする「冬の響」よりも、私は夏の夜に、我が地球全體を覆ひ包んで響き立てゝゐる此の大きな海濤の音の一層爽かな一層男らしい響が好きだ。

潮の滿干に人の血潮の昇降が伴なつてゐるならば、また人の生死の呼吸はいつも海の潮の干滿に左右されてゐるならば、我が小さな胸の鼓動の中にも、大きな荒浪の響が籠つてゐるのだ。波浪の崩れては捲き

上り、捲いては崩るゝその響は、胸に手を當てゝ、其處に聽くことが出來よう。靜かに更けた夏の夜に、野に山に、都會に村落に、空に星に、響を傳へて遠く〳〵消えて行く「大きな波」、人はそれを眠つてゐる耳に聞きながら、知らずして、それとも氣がつかずして過してしまふのだ。

大江に月が涌いて萬波遠く海上より逆寄せに寄せて來る。奔馬の狂ふ如く、鐵騎百萬寄せて來る如き音を立てゝ江上の波が涌き上る。八月潮滿ちて蘆花が纔かに咲き出でようとする頃、ことに此の江上の響が高い。その響を耳にする時は、聽く者は皆落着いた心持になれず、何事か遠くの國の事でも告げ知らされるやうに、身を起して江邊へ出て見ずには居られない。忘れてゐたものを思ひ起させる響、隱れてゐるものを誘ひ出し、脫れるものを抑へつける響、人の體軀の中に潛み入つてゐる有らゆる思有らゆる調子を持出させて、心の限を盡して働かせ

る響だ。

水滸の中に長年立籠つてゐて、人を斬り家を燒き、天下の豪傑と結び、歸順して後は、征戰縱横、堅陣を破り、强賊を挫いて、只管豪强をこれ事としてゐた怪僧魯智深でさへ、八月秋立つて、夜深に響き渡る江上の此の波浪を耳にした時は、がばとばかり身を起して、窓から遠く月下の狂浪を眺めやつた。空浸すばかりに高く月光を亂して、音高く寄せて來る萬波の頭、一波一浪盡く何物かを齎すものゝやうだ。じつとその波の面を見詰めてゐた怪僧は、やがて、「我が終焉の期が來た。」といつて、月光の射し込む草堂の中に、固く膝を組んで眼を閉ぢてしまつた。

波浪の響は高く江上に往來してゐる。大悟した人の頭には、胸には、其の響の去來が傳はつて來る。閉ぢた眼は復び開かない。波の響に搖れて、江上の微風は傳はつて、眼上の眉毛を動かしても眼は開かない。

曉近く波は次第に遠退いて、響は小さく、次第〳〵に江上が平かになつて來ると、月の面は白く色褪せて、曉烏の鳴き聲が波の上を渡る。默坐の人の呼吸は全く絶えて、波と共に魂は遠く、形骸を捨てゝ走つてしまつた。

秋次第に更けて來る空には、細い鱗形の雲が飛び〳〵に散つてゐる。もう初夏空の輝く白い雲は仰いでも見えない。九月一ぱいの動亂常ない空の景色とは違つて、定まつた秋の中には物音が皆つゞまやかに聞えて來る。恐らく、雲の下なる波の響も只互に何事か囁き合つてゐるやうに、羽田あたりの岸へ寄せて來ては蘆の根元に咽んでゐるのであらう。

秋晴の日は、私は海を思ふよりも野を思ひ山を思ふ。秋になつて、山は常よりも澄渡つてくつきりといかにも男らしい姿を人に見せてゐる、野を行けば野に言ひ難い懷しさが籠つてゐる。が、曇日の夕方など、稍、

冷たい風が肌を襲つて來るころ、海の波の忍び〳〵に蘆の下葉に寄せて來る姿を見ると、たまらない寂しい懷かしさがある。

「潮生じて蒹葭蘆荻響く」といふ詩の句がある。ぱさ〳〵と蒹葭の葉を壓し付けるやうにして寄せて來る波、ざぶ〳〵と岸に溢れて下葉を浸し、入江の奥まで入り込んで來る夕方の潮、人も居ない海際の夕暮、水鳥の影も見えず、冷たい雲が水を閉ぢて、無論船も見えない。生きて動いてゐるものは只水だけ、それも大きな活動を見せるではなく、海上は何の波瀾もない。その海の端々がひし〳〵と陸に迫り、細い入江に逆寄せて、大きな力の尖端だけを草の葉の先きに、蘆の根元に見せてゐるばかりである。

強い大きな果てしない力が、大手を擴げ陸を抱く樣にして寄せて來る、晩潮のゆつたりした姿は曇日の風の無い日に殊に思はせられる。その力が伸び得るだけ伸び得ると、もう十分爲し果てたといふやうに、波

の先端は入江の中にたゆたつて、闇の下つて來るに委せて、水草と蘆の折葉と入り亂れて眠つてしまふ。海の靜寂は斯樣な日の夕方にこそ最も好く味はれる。

私はも一つ自分の好きな詩の句を拔いて見たい。

「潮は空城を打つて寂寞回る」幾度び誦して見ても寂しい此の句の趣は盡きない。海近い入江の岸にでも立てられてある城であらう。入江の蘆荻は枯れて、蘆の穗も白く飛んでしまつた秋の末らしい暮方で、雲は空を鎖し、空壘に這ひまつはつてゐる蔦の葉も枯れて黑く、動物の遺骸に殘る血管の黑ずんだ線のやうに見えてゐる。がらんとして黑い城壘の中は、只闇が領してゐるばかり、蝙蝠の飛ぶのすら見えない。その寂寞の中をざぶんと大きく石壘に打當つて返る潮の響、恐らくこの城の出來始めて以來同じ響を立てゝ、同じ寂しい響を立てゝ潮はこの城の下へ攻寄せて來たものであらう。それを人の多く集つてゐた時

は、そのもの寂しさも知らずに、互に紛らし合つて、只樂しいものゝやうに聞きなしてゐたのであらう。

その潮の音は昔も今も變らない。闇を搖がし夜を亂して城の下へ打寄せて來る。寂寞の領してゐる城の周圍、及び城の中へ不意に打込む潮の響に、寂寞の幕は一時ぱつと破られるが、また潮の落ちると共に寂寥が四方から攻寄せる。波と寂寞との爭ひ、人去つて何も住まない空城に、この潮と寂寞との戰鬪は終夜暗中で續けられてゐるのである。

ドバー海峽　フランスとイギリスとを分つ海峽
Dover
ドバー　イギリスのケント縣東海岸の海港

月の照る夜に、細舞ひ雲が一片低く靡いて空にかゝつてゐる時、遠く東南の空を見てゐると、ドバー海峽に船を浮べて、佛蘭西の岸邊とドバーの埠頭とに寄する銀波を眺めて、その波の響に聽入つた詩人の姿を思ひ浮べずには居られない。佛蘭西の岸邊の人家の燈火さへ、手に取る如く見える。海風は波を渡つて甲板の上を吹去る。岸邊に咽ぶ波、波にまろぶ岸邊の砂礫、其の砂礫の打合ふ音、崩れては起き上る波と波との奏する樂の音、海上で耳にするこれらの響はやがて人生の寂しい悲調に過ぎない。胸の鼓動に波の音を聞き得るならば、波の調に人生の響が籠つてゐる筈だ。自分を此の大きな自然の前に開きさへするならば、波は人生の響を立てゝ四方に鳴りわたつてゐるのである。

千波萬波は月を碎いて四方に向ふ。夜もすがら、また日中でさへも、此の波の響はどう〳〵と、我が地球全體を包んで、寸時も止まず鳴り渡つてゐる。地球を離れて、空中から瞰おろすことが出來たならば、我が地球は晝夜を分たず、此の波の響に包まれて、虛空を廻り轉じてゐるのだらう。銀盤上に黑い陸影、その陸影の四方を繞つて千古萬古、我が潮の響は鳴り渡つてゐるのだ。（若き自然）

相馬御風
名は昌治
文學者
明治十六年
新潟縣糸魚川生

九　生の寂しみ

井伊直弼の茶道に關する遺著の中に「茶湯一會集」といふのがある。その序文に左の如き一節がある。

この書は茶道一會の始終、主客の心得を委しくあらはすなり。故に題號を一會集といふ。なほ一會に深き主意あり。抑、茶湯の交會は一期一會といひて、たとへば幾度同じ主客交會すとも今日の會に再び歸らざることを思へば、實に我が一世一度の會なり。さるにより主人は萬事に心を配り、聊かも粗末なきやう深切實意を盡し、客も其の會に又遇ひがたきことを辨へ、亭主の趣向何一つ疎かならぬを感心し、實意を以て交はるべきなり。これを一期一會といふ。必ず必ず主客とも等閑には一服をも催すまじき筈のこと、卽ち一會集の極意なり。

一期一會といふ言葉にはまことに深い味がある。その心がけを以て主客交會するといふことは單にこれを茶湯の極意とのみ解したくはない。

この「茶湯一會集」には、更に次のやうな忘れがたい一章がある。それには「獨坐觀念」といふ見出しさへつけられてある。

主客とも餘情殘心を催し、退出の挨拶を終れば、客も露地を出づるに高聲に話さず、靜かにあと見かへりて出でゆけば、亭主は猶更のこと客の見えざるまでも見送るなり。さて中潛り・猿戸その外障子など早々締め立てなどいたすは不興千萬、一日の饗應も無になることなれば、決して客の歸路見えずとも取片付け急ぐべからず。いかにも心靜かに立戻り、この時にじりあがりより這入り、爐前に獨坐して、今暫く御話もあるべきに、もはや何方まで參られたるべき、今日一期一會濟みて再び歸らざることを觀念し、或は獨服をもいたすこと是一

中潛り　茶室の庭の外露地と内露地とを界する門
猿戸　庭の入口に立てる質素な戸
にじりあがり　茶室の入口

會極意の習なり。この時寂寞として打語らふものとては、釜一口のみにて、外に物なし。まことに自得せざれば到りがたき境界なり。こゝに至れば、もうこれは單に茶湯の客を送り出す儀式などといふ境を遙かに通り越してゐる。

私はこの「一期一會」といふことの味を思ふ度に、かの芭蕉の終焉の日記である「花屋日記」の一節を聯想せずには居られぬのである。

花屋日記　二卷　元祿七年九月芭蕉が大阪の花屋で發病から亡くなる迄の記事

支考・乙州等去來に何か囁きければ、去來心得て病床の機嫌をはからひて申していふ、「古來より鴻名の宗師多く大期に辭世あり。さばかりの名匠の辭世はなかりしやと世にいふもあるべし。あはれ一句を遺し給はゞ、諸門人の望足りぬべし。」師のいふ、「昨日の發句は今日の辭世、今日の發句は明日の辭世。生涯言ひすてし句々一句として辭世ならざるはなし。若し我が辭世はいかにと問ふ人あらば、この年頃いひ捨ておきし句、いづれなりとも辭世なりと申し給はれかし。」

支考　乙州　去來　何れも芭蕉の門人

芭蕉のこの「句々辭世ならざるはなし。」といつた心、「昨日の發句は今日の辭世、今日の發句は明日の辭世。」といつた心、それは正しく井伊直弼の茶道に於ける一期一會の心である。芭蕉にあつても澍露軒にあつてもおそらく此の心を痛感することによつて、始めて人に對する本當の愛を、天地に對する本當のまことを得ることが出來たのであらう。

澍露軒　井伊直弼の茶道の號

「諸法從來常示寂滅相。」芭蕉は此の二句を釋尊の辭世であり、一代の佛教此の二句より外になしと言つてゐる。芭蕉も井伊直弼も共に佛教に歸依してゐたことは事實である。しかし彼等の特に芭蕉の藝術心境が、主として佛教の無常觀や寂滅觀によつて始めて到入することを得たものであるとする觀方には、私は贊同することは出來ない。

諸法從來　花屋日記に出てゐる

ものゝふのやそうぢ川の網代木にいざよふ波の行くへ知らずも。

これは萬葉集にある柿本人麿の名高い歌である。此の歌について、これは決して佛教の無常觀ではない、日本民族特有の現實感情をそのま

ま深めて行つたものだといふやうな意味のことを言つてゐた人があつたが、芭蕉などの痛感した生の寂しみも、やはり根本は純乎たる自然直觀から來てゐるやうに思はれる。人麿が川波の行くへを眺め入り感じ入つた刹那の其の寂しみは、決して理論的な孤獨觀念ではない、自己の生そのまゝの內觀があるのみである。

この道や行く人なしに秋の暮。

と芭蕉が吟じたのはそれは、決して比喩でもなければ、理論觀念でもなかつた。それは最も純な自然直觀の心境であり、同時にそれは最も眞實なる自己の生の內觀であつた。

あまり多く俳句といふものを詠んだことのなかつた良寬和尙は、臨終に際して左の如き傑れた一句を遺した。

裏を見せ表を見せて散る紅葉。

良寬和尙の此の一句も、それは決して單なる比喩などではなかつたと思はれる。おそらく其の場合、彼の心の眼にはさうした如實の自然が鮮かに眺められたにちがひない。ほのかな黃金光の遍照した靜かなうらゝかな秋の空、それを彼は見た。その裡には、はてしも知れず擴つた曠野、その曠野のたゞ中に默然と立つてゐる一本の大きな樹、その樹の枝から風もないのに二ひら三ひら音もなく或は裏を見せ、或は表を見せつゝ舞ひ落ちる美しい色の紅葉、それを彼は見た。而もそれが今將に亡び行かうとしてゐる彼自らの姿であるなどと思ふどころではない、擴充した絕對化した心持で彼は眼前に展かれた其の自然の光景を心ゆくばかり眺め味つたであらう。かくて彼のたましひは全く自然そのものゝ寂しさであつた。彼の感じた自然の寂しさは、その瞬間あらゆる複雜を藏した生そのものゝ魂であつた。思ふに、私たちの懷かしむ吾が國古來の傑れた詩人たちの多くは、かくの如き自然そのも

のゝ靜かな直觀によつて彼等の魂を生かした人たちではなかつたらうか。さうした藝術的修行が、同時に彼等にとりて人間としての最も貴い修行であり勤行ではなかつたらうか。

西行の和歌に於ける宗祇の連歌に於ける、雪舟の畫に於ける、利休の茶に於ける、其の貫通するものは一なり。

かう芭蕉は言つてゐる。そして其の謂はゆる貫通する一物は、芭蕉に從へばそれは「風雅の誠」であつた。「風雅の誠」は、藝術心の誠である。そしてそれは同時に生そのものゝ誠であり、宇宙そのものゝ誠であつた。此の誠に終始する生活が即ち彼にとりては本當の魂の生活であつた。

芭蕉は一俳人なり。されど五十年の生涯を自然の渴仰に捧げて或は出羽象潟の時雨に腸をしぼり、或は佐渡北海の荒海に魂を削りて一樹の宿りにもとく〳〵の雫むすびもあへず、旅魂そゞろに枯野の風雲を追へりし彼が姿を偲ぶもの、誰かその魂に鑄られたる「實」の一

字を否むべき。彼は自ら謙して花鳥に情を役してこの一すぢに繫がるといへり。しかも行々しば〳〵大自然の一路にわけ入りて、覺えず涙下りしその意識よ。あはれ彼は趣味の門より入りて趣味の太源に道交しぬ。かくの如くして彼の句はじめて凡ならず、俗ならず。こゝに芭蕉の宗教ありといふ、これをしもわが好める筋に佞したる言なりといふべきか。

と故人梁川も言つてゐる。梁川の此の趣味の太源に道交するといふことが、とりもなほさず芭蕉の謂はゆる西行の和歌に於ける、宗祇の連歌に於ける、雪舟の畫に於ける、利休の茶に於ける、其の貫通する一物である。

芭蕉や良寛のやうな人たちにとつては、藝術の修業が同時に最も貴い宗教的勤行であつた。それは實に最も嚴肅な修道であり、最も敬虔な

勤行であり、最もすなほな恭敬であつた。而してたゞ寂の一字あるのみと芭蕉も言つてゐる如く、此の天地の寂しみ、生の寂しみに徹することが彼等の修行の根本であつた。芭蕉が「我が詠み遺すところの句々皆辭世ならざるはなし。」と言つた覺悟も、茶湯の交會はすべてこれ一期一會と觀念することを以て茶道の極意とした井伊宗觀の心境も皆この天地の寂しみ、生の寂しみの味到に外ならぬのであつた。

しかし、彼等の味到した寂しみは、決して謂はゆる空觀でも虛無見でもなかつた。それは「私」にとらはれた否定ではなかつた。それは實に萬象常住の味であつた。從つて彼等の隱遁は謂はゆる厭世ではなくして、むしろ本當の修業であつた。またそれは徒らに自ら獨りを清うせんとする謂はゆる獨善の境界などではなくして、本當に一切を清淨にする念願からであつた。

芭蕉とか良寛とかいふ人々の生活に一貫したところは、實に此の生の

寂しみ、天地の寂しみの痛感であつた。永い年月の間の彼等の孤獨な修行は、たゞひとへに此の味に徹せんがための修行であつた。而して眞實に此の味に徹することによつて、彼等は始めて本當の「まこと」の心を得、本當のたましひの世界を得たのであつた。

寂しさなくば、うからましと西上人の詠み侍るは淋しさをあるじなるべし。　又詠める

山里にこはまた誰を呼子鳥ひとり住まんと思ひしものを。

獨り住むほど面白きはなし。　長嘯隱士の曰く「客は半日の閑を得れば主は半日の閑を失ふ。」と。　素堂常に此の言葉を憐む。　予も亦

うき我をさびしがらせよ閑古鳥。

とは或寺に獨り居ていひし句なり。

かう芭蕉自ら「嵯峨日記」の中に書いたのも、さうした自らの心境を告白したものに外ならぬ。

長嘯　木下勝俊　江戸初期の歌人
素堂　山口信章　元祿ごろの俳人　北村季吟の門人

しかし、前にも述べた如く芭蕉などいふ人々がかやうに天地の寂しみに徹しようと求めたのは、決して一切を捨て去つて空に歸さんがためではなかつた。むしろその反對に、彼等は此の寂しみに徹して始めてたましひの「まこと」を得、それによつてこそ始めて眞實に一切に接し得るのであることを信じたがためであつた。古池に跳びこんだ一匹の小さな蛙の立てた水の音に、天地幽玄のひゞきを聞き得たほどの芭蕉の澄みきつた心の耳も、垣根に生えた一本の雜草に咲く見るかげもない春の花に、宇宙の生命の輝を觀ることを得たほどの彼の澄みきつた心の眼も、すべては此の「まこと」に徹した心のたまものでなくて何であらう。

一期一會を觀念することによつて、井伊宗觀は茶湯の交會の眞實の味を靜かに徹し味はふことの出來るまことの心を得た。幽玄なる天地の寂しみに徹することによつて、芭蕉は始めて眞實に萬象の生命をい

つくしみ味はふことの出來るまことの靜かな心を得た。即ち彼等の此の天地の寂しみ、生の寂しみに徹せんとした修行は、同時に萬象を攝取し得る心のまことを得んとする欣求だつたのである。去來が芭蕉に「正風の大意如何」と尋ねた時に、芭蕉が「俳諧はよく萬物に應ずることを旨とすべし」と答へたといふも、その意に外ならぬ。もし此の場合去來の問が俳諧道の修行如何といふにあつたら、おそらく彼は孤獨の勤行を以て答へたであらう。良寛にとりても芭蕉にとりても決して孤獨そのものが最後の念願ではなくして、眞の孤獨に徹することによつて得られたたましひのほがらかさ、ひろやかさ、しづけさ、すなほさが貴かつたのである。

嘗て窪田空穗氏が西行の生活と歌とについて書いた時にも、修行時代の西行について、「修行のために寂寥の境から境へと移つて歩いた。それは自然の荒涼に身を置くといふことが彼には良い方法と思へたか

らであるらしい。」といひ、更に最後の境地に到達した彼について、「宇宙の寂寥に居てそれに驚かない彼となつてゐる。そして振返つて人間を見て靜かにあはれみの心を寄せてゐる。」といひ、「最後の彼は最初の彼のやうに京都に歸つて來てゐた、最初の彼のやうに櫻を慕ひ、佛を慕つた。」といつてゐるのも、思ふに上述の如き心境を説明しようとしたものであらう。

かうした藝術の、風雅の、歌の、俳諧の門よりして天地の寂しみに味到し、生の寂しみに徹した人々の得てゐた「まこと」の境地が、不思議な力を以て私たちの心を惹きつける。そしてさうした人々の生活と藝術とに對する私たちのすなほな恭敬が、最も歡ばしい「たましひ」の靜けさを私たちに與へてくれるやうに覺える。そこには枯木寒巖などの冷たさは聊かも感じられない。何とも言ひやうのない寂光が、常に私たちの

心をあたゝめてくれる。そして一切に向つてすなほなるべき私たちの心の「まこと」をはぐくんでくれるやうな氣がする。

此の翁　其角の著した枯尾花の中にある

「此の翁孤獨貧窮にして、德業に富めること無量なり。」其角の師の翁に對する此の評語は、よくも言ひ得たといふ外はない。これは直ちに以て良寛にもあてはめることが出來る。（愚庵和尚その他）

齋藤茂吉
歌人
醫學博士
明治十五年
山形縣生

一〇　羊齒の葉

齋藤茂吉

かたまりて土をやぶれる羊齒の芽の卷葉かなし
く春ゆかんとす。
春の風吹きたるならん、目のもとの光のなかに塵
うごく見ゆ。

來て見れば雪げの川べ白がねの柳ふくめり、蕗の臺も咲けり。

齋藤茂吉

梓弓、春は寒けど日あたりのよろしき處つく〳〵し萌ゆ。

鷄の卵の黄味の亂れ行くさみだれ時はあぢきなきかな。

おのが身をいとほしみつゝ歸り來る夕細道に柿の花落つも。

眞夏日の光澄み果てし淺茅原にそよぎの音のきこえけるかも。

あかときの草の露たま七いろにかゞやき渡り蜻蛉うまれぬ。

秋の風吹きてゐたれば、遠かたの薄のなかに曼珠

沙華赤し。

赤き旗けふはのぼらず、どんたくの鐵砲山に子供らが見ゆ。

ひさかたのしぐれ降りくる空さびし、土におり立ちて鴉は啼くも。

かへり來し家にあかつきのちやぶ臺にほのぼの香する澤庵を食む。

鐵砲山　東京青山にある歩兵の射撃用の丘

一一　身邊雜事

阿部次郎
哲學者
東北帝國大學教授
文學博士
明治十六年山形縣生

阿部次郎

他人の長所を認めて、これを尊重し、劬り、助成することは、雜り氣のない朗かな歡びである。併し不幸にして我等が眼を開いて他に對するとき、

我等の瞳にその影を落すものは、他人の長所や美點ばかりではない。その弱點や短所も亦否應なしにその黑影を印象する場合がある。その時この餘儀ない印象を如何に取扱ふべきか。この問題が自分にとつては一苦勞である。

阿部次郎

その缺點が甚だしく重大な、致命的なものでない限、これをむきになつて憤慨したり、これを自分に加へられたる傷害として不愉快がつたりする心持からは、自分は可なり遠ざかつてゐる。この弱點を捕へてそれを玩具にして、調戯つたり、くすぐつたりする惡戯氣も、近頃は隨分少くなつて來た。自分は對手の弱點を自分一人の腹で呑込んで、默つて之を看過して了ふか、若くは好意ある微笑を以て、對手がその弱點を始末して行く自然の經過を見護つてゐるかすることが出來るやうに思ふ。さうして必要に應じて適度の忠告と暗

示とを與へて行くことが出來るやうに思ふ。對手の長所を重んじてこれを助成して行くことに中心の態度を置くかぎり、多少の缺點を寛容することは、そんなに困難なことではない。

併し、自分は自分の友人に、「彼は俺の缺點を呑込んで知らん顏をしてゐる。」といふ印象を與へることを恐れる。自分は無意識の間に、自分が對手の弱點を脅す態度をとつてゐることを恐れる。その人に十分の信頼を寄せてゐる場合でないかぎり、他人から呑込まれてゐると思ふことは、決して心持のいゝものではない。自分は他人から十分に信頼される資格を自分に許すことが出來ないから、自分が對手の缺點を看過して默つてゐることが、却て對手に不安の念を與へることを恐れるのである。若しN先生のやうに、對手の弱點に對する不同意を即座に即刻に發表して、而も少しも相互の親愛を傷つけずに行くことが出來たら、自分はどんなにせい〳〵することであらう。併し現在のところ自

分にはそれが出來ない。自分は對手の缺點を感じながら、或時が來るまではこれを自分の腹の中に藏つて置く。さうして或特別に靜かな時を擇んで、出來るだけ和かな言葉を以て對手に忠告する。現在の自分にはこれ以上のことは德が足りなくて企て及ばないのである。凡そ言へないことがあると云ふことは、人と人との間に在つて決して喜ばしいことではない。然るに、自分には時として對手に言へない心持がある。若しこの沈默が善良な意志から出てゐることを信じ得なかつたら、自分は嘸氣詰りな人に見えることであらう。唯自分の善良な意志を信ずることが出來る人のみ自分の友達となり得るのである。さうして更に惡いことは、自分の輕々に看過したつもりでゐる缺點が、その實自分の心の底に引掛つて、對手に對する輕蔑若しくは怒を構成してゐる場合があることである。自分は時として意識的にその人の長所を見ながら――若しくは見ようと努めながら無意識の間にその

人を輕蔑してゐることを發見する。この矛盾を發見することは自分にとつて特に苦い經驗である。

この間Xが來てYの書いたものゝ話をしたとき――Yの書いたものの不合理を指摘してこれを笑つたとき、自分はどうにかしてYを辯護しようとした。一見明かに不合理なYの言葉を、どうにかして助るやうに解釋してやらうとした。併し惡いことには、Xの話をきいたとき自分も高々と笑つたさうだ。而も猶惡いことには自分は自分が高々と笑つたことにまるで氣が附かずにゐた。自分は言葉でYを辯護して、心でYを笑つたに相違ないのである。氣取らうとして益、桁を踏外すYの態度を笑つたに相違ないのである。

固よりYを辯護した自分の言葉が虛僞の言葉でないことは、誰よりも自分自身が最もよくこれを知つてゐる。併しそれは如何にも底の淺い言葉である。輕蔑と肩を並べた好意、痛罵にも劣れる好意を、Yが喜

び得ないのは固より當然である。自分はこのやうな好意がYと自分との間に好意として通用し得ないことを熟知してゐる。自分はそれが好意として通用し得る日が來るまで、沈默して之をしまつて置かなければならない。さうして努めて彼を痛罵する方の一面にエンファシスを置かなければならない。痛罵の段階を經なければ、自分の彼に對する好意は何時までも生きて來ないであらう。（三太郎日記）

一二　勞働と人生

綱島梁川

一

ゼネラル、ブース曰はく、「働いた上にも働いて、も一つ其の上にも働け。」と。彼は八十年の生涯を働き通しに働きたる人なり。彼は働の權化

綱島梁川
名は榮一郎
倫理學者
岡山縣高梁町生明治四十年歿年三十五

ブース
William Booth (1829–1908)
救世軍の創立者
英國人

なり。余はブースの名を耳にする毎に、先づ此の一事に想到す。而して以爲へらく、「彼の生涯より他の一切を控除し去るとも、唯此の一事あり、以て優に彼を不朽の人たらしむべし。」と。讀者よ、誤解することと勿れ、余が今こゝに働と謂へるは、必ずしも彼が軍隊組織を以てせる社會的慈善的事業の、世の人目を炫耀せる如きものゝみを意味せるにあらざるを。外に形はれたる社會的事業は、未だ以て余が謂はゆる働の全內容を盡したるものにあらず。手を動かし、足を働かすことゝ共に、目に見えざる精神上の思索冥想も亦働にあらずや。現實的・物質的の事功をのみ活動といふを休めよ、思を天地の悠久に騁せ、憂を千載の後に託するも、亦これ偉大なる活動ならずや。至誠を以て念佛一つ他のために捧ぐるも、亦これ人道に對する働なり。まさに遊ぶべきに遊ぶ、これも亦形を換

綱島梁川

へたる働なり、活動なり。

二

「働け」といふ一語には、何人をも肅然たらしむべき權威の響あり。古より哲人・聖者は、常に勞働の神聖を唱ふ。而も勞働の神聖といふ此の權威ある一語も、今や漸く文字と共に陳りゆきて、復現代青年の心を其の奥底より衝き動かす新鋭の福音たらざらんとするものゝ如し。之を唱ふるものは、徒らに聲を高うして「たゞ働け。」とのみ叫び、之を聽く者も亦、之を以て尋常一樣同情も涙もなき經世家者流の言説として放過し去らんとするなり。思ふに、世の識者等が、謂ふ所の勞働神聖觀をば一種の呪符の如くに揮り翳して、現代青年の一面の煩悶病を立ちどころに調伏退治し得べきが如くに思ひ做せるは、或は無理ならぬ事なりとせんも、彼等の勞働觀なるものは、斯くの如き奇蹟的偉功を奏し得べきほどに意義徹底したるものなるか。彼等常に言ふ、「思はず考へず、何で

もよいから、只傍目をふらず一心不亂に働け、活動せよ。」と。又言ふ、「煩悶を解決してさて後に働くにあらず。まづ働け。働くうちに煩悶おのづから解決せらるべし。」と。或は亦言ふ、「爾理窟を措いて先づ生きよ、生存の策を立てよ。而して生存は活動と相須つ。生存し活動して後、一切人生問題の解決は、おのづから爾手中の物たるべし。」と。彼等が世の青年の爲に謀る一念の老婆親切は謝すべし、彼等或はそれ達識の活儒か。唯惜むらくは、彼等が言説には頗る條理空疎の觀あり。彼等は「何でも先づ働け、働くうちに煩悶は消え去るべし。」と言ふ、されど、世の青年に取りては、その働といふことが愼重の解決を要すべき當面の問題なるなり。彼等はまた口を極めて生存の要を言ひ、生存ありて煩悶の解決も着手の餘地ありといへど、しかも其の謂ふ生存そのことが、世の青年をして現に煩悶せしめつゝある重大なる「躓きの石」たるにあらずや。啻に然るのみならず、彼等の或者の中には自己及び萬有の存在そのも

パスカル　Pascal (1623–1662)　佛國の幾何學者哲學者

のに對して深刻無限の懷疑を抱けるさへあるなり。「無限の空間の長しへなる沈默は人をして戰慄せしむ。」とパスカルの言へるが如き一種不可言の煩悶の經驗は、彼等の概ね共有する所にあらずや。世の所謂識者にして、若し之をしも一種の哲學的空想病に過ぎずとして、冷笑し默殺し去るが如きことあらんか、これ彼等は未だ眞の自覺と同情とを以て、現代青年の(少なくとも一部の)煩悶問題に面接せざるものと謂ふべきなり。所詮、今日、少なくとも教養ある青年の煩悶問題は、世の一部識者の指頭の觸着せるより更に一段深き處に觸着せるなり。識者或は色然として、斯くの如きは最早常識以外に逸したるもの、論外の沙汰なりと喝し去らんか。されど事實は尙臆面なく斷言すべし、「少なくとも人生問題としての勞働といひ、生存といふこと、今日の一部の青年に取りては、生死を賭して解決を要すべき最も莊嚴にして沈痛至切なる一箇の問題なり。」と。

三

センチメンタリズム　Sentimentalism

カーライル　Carlyle (1795–1881)　英國の評論家で歷史家

現代の青年にして、若し眞の眼前の物質的事功主義にのみ奔る傾あらんか、或はまた空想に耽り、感情を弄ぶ輕浮なる女性的センチメンタリズムに溺るゝ弊あらんか、或はまた此の滔々たる薄志者流以外に眞面目なる精神と堅實なる自覺とを持しながら、端なく時代の思潮たる懷疑・煩悶の大波に捲込まるゝ運命に逢着したらんか、これらの慘ましき時代病の療法として勞働神聖觀を提供するは最良の對症藥たるを失はざるべし。吾人―またカーライルと共に、一切の疑問の窮極の解決は竟に働にあるべきを信ずるものなり。但、働は呪文にあらず、護符にあらず、唯之を口に唱へ壁に貼したるのみにて其の卽效の靈驗を見んには現代病は餘りに複雜精緻なり。働とは何ぞや、働の中には如何なる光輝ある實驗的意義を含めるか、乃至如何樣に働くことが眞に有效なる働たるを得べきか、此等及び此等と關聯したる問題につきて、余が以

下提出せんとする解答にして、若し多少にても讀者の心に響くべき或者を有し得たらんには、これ余が光榮なり。然り、これ實に予が光榮の働なり。諸君は、或は鍬を以て働くべし、或は斧・鋸を以て、或は鑿・槌・書籍・金錢・辯舌を以て働くべし。而して予は今筆を以て働く。各、皆働くなり。

四

勞働は人生夢幻觀と撞着す。世界と人生との夢幻視せらるゝ所には、何の眞面目なる勞働かあらんや。こゝに働くは夢みるなり、描くなり、行く水に空華の影を追ふなり。勞働の觀念は嚴に之と相容れず。勞働は眞面目なり、嚴肅なり、直に吾人の心魂に響く力の聲なり、事實の聲なり。勞働は天地人生を莊嚴なる事實と觀ずる根本的豫想の上に榮ゆべき生命の大樹なり、そは勞働なる者が莊嚴なる事實なればなり。人生夢幻觀は竟に眞面目なる又偉大なる勞働を產出するの國土にあ

らざるなり。明治の先覺福澤諭吉氏の如きは、天地人生を夢なり戲なりと觀ずる根本の見地に立ちながら、尙この一場の夢や戲を夢や戲と觀ぜずして、恰も眞面目らしく働く所に處世の妙趣ありと說きたり。余は曾て之を奇怪なる矛盾觀として斥けたり。人生若し夢幻の戲ならば、勞働も亦眞面目なるを得ざるべく、勞働若し眞面目のものならば、人生はた夢たり戲たることを得じ。一方の觀は嚴密に他方の觀と相背馳すべきものなり。福翁の如き人生觀や處生觀は、斷じて誠實なる人心の要求を滿足せしむる所以にあらざるなり。夫れ、生くるはやがて働くなり勞働を離れて人生あらず。勞働は人生の眞面目を要求す。聽かずや、鍛鐵工の槌の一揮一下に「人生は眞面目なり。」(Life is earnest)といふ沈痛の響あるを。勞働は事實なり、人生の事實なるが如く事實なり。眞に勞働に對して嚴肅なる興味を有するものは、天地人生を一場の夢幻と觀じ去るを得ざるなり。

五

勞働は又發達といひ、進化といふことゝ至密に抱着す。

吾人は事物の發達進化を離れて、光輝ある勞働の意義を捉ふること能はず。吾人が働くは單に生きんがためにあらずして、更に一層善き情態に於て生きんがためなり。發達進化の觀念の活潑なる所、手おのづから動き、足おのづから前む。現實は小なり、發達は大いなり。吾今如何に果敢なきものなりとも、日を積み月を累ねて大いに爲すあるべしとの一念現前するや、吾、吾を超越する猛心、全涌し來る。人生、若し何等の發達進化なく、又はただ同一事、同情態を反覆するにとゞまるがごときものならば、人は忽ち運轉を氷に喰ひ止められたる水車のごとくなりぬべし。風吹き雲奔る天地の健行ありて、宇宙に不斷の生長あり。君子は自彊して息まず、健德日夜に進動して、新となればなり。吾等が人格に事業に、發達進化といふ生命の潮の脈うつ不斷の自覺あればこ

そ、吾等が夕べを送るの夢安らかに、朝たを迎ふる祈勇ましきを得るなれ。到達や獲得の喜は人の常に經驗して知る所、されど同時に又、こゝに到る徑路即ち發達そのものにも無類の喜あるは、吾人の經驗する所なり。吾人は豐富なる人生經驗の一面として、「發達の味」といふことを提唱す。「發達の味」に生くるものは、永久に死を知らず。而して發達の味は、所詮勞働を離れては存し得ざるなり。

勞働の味、即ち發達の味にあらずや。勞働が吾人中心の喜たり得るは、そが吾人をして、常に現在の「吾」より一層「高き吾」に進ましむるが故にあらずや。思想深邃なる一詩人が、「人はたゞ部分に於て在り、併しながら全部に於て在ることを望む。」と歌へりけるは、いみじき眞理なるべし。人が日夜遑々として働きいそしむは、畢竟此の希望あればなり。貧しき淺蜊賣の子だに、其の淺蜊かごを擔いで、わが家を立ち出づる朝な朝なの顏には、今日は昨日より多くの賣代を得べしといふ希望の色の輝

くを見ずや。日に新にして又日に新なりといふ發達進歩の觀念は、人をして一念の底より奮躍せしむ。偉人は他が睡眠を貪る間にも、一息の油斷なく靜かに働きいそしみて、能く其の大をなすなり。吾人は、今にしてかの歴史的發達の觀念を闕如せりし、若しくは少なくとも之に疎遠なりし古印度人が竟に嚴肅なる勞働の興味を有し得ざりしことの當然なるを思ふ。宇宙は生長し、人生は發達す。而して吾人は、勞働によりて以て此の進化の大潮に棹すことを得るにあらずや。勞働を離れてまた進化發達といふものはあらざるなり。

天何をか
子曰天何言哉、四時行焉百物生焉天何言哉
（論語）

六

「神、光あれと言ひ給ひければ、則ち光ありき。」天地森然之を貫くもの、ただ一箇の働なり。宇宙の開闢史は、此の偉大なる働を以て其の開卷第一の頁を飾られたり。働は天地の歴史の始（アルファ）にして終（オメガ）なり。古聖は曰ひき、「天何をか言ふ、四時行はれ百物生ず。」と、又曰ひき、「吾が父は今に至

るまで働き給ふ。」と。吾人が天地に對して、虚心先づ觀じ來るは其の一息不斷の氣化流行なり。即ち働なり。萬物は働によりて常に富み、常に完く、常に充ち滿つるなり。働ある、即ち萬有の「在り」と謂はるゝ所以なり。神は即ち働なり、働は即ち神なり。何の働もなき寂靜涅槃といふものは矛盾語なり。寂靜涅槃はやがて働の極、活動の極、充實の極にはあらざるか。斯く觀ぜざる全くの消極的、虚無的涅槃觀は、到底天地の實相を如實に寫したる言葉として、吾人人心と深き交渉を有するに足らざるなり。天地の實相を働と觀じ、活動と觀じて、便ち人則の極は立ち、道義の門は啓かるべし。かるが故に、「易」の作者は天行の健に君子自彊の範を置き、猶太の神人は「天の父は今に至りて尚働き給ふ、われも亦働くなり。」と喝破せり。更に歐洲今代の儒流の大家が、概ね天地實在の本性は、健行即ちアクチヴィテー、又テーテヒカイトにありといふ揆一の觀を立て、而してこの觀の上に德教彝倫の樣々の系統論を布かん

天行健
易經の傳に「天行健、君子以自彊不息」

アクチヴィテイ Activity
テーテヒカイト Tätigkeit 活動

とするは人の能く知る所なり。身を田塍の間に起したるわが二宮尊徳が一挺の鍬を以て幾多の廢田を興し、窮村を濟へる祕訣は、心を密にして天地健行の不息の流行に乘託したるが故なりと謂ふにあらずや。

七

働くは現在を働くなり、今の一念を働くなり。今の一念を働かざる働といふものあることなし。働とは現在を充たすことにあらずや。過去は追ふべからず、未來は雲霧に墜つ。眞に吾人に對して在りと謂ひ得べきは唯現在のみ。過去を想ひ未來を測ることも、亦これ現在の働なり。現在を充たす働の中より光輝ある理想も働き、偉大なる希望も華さくなり。爾の現在を充たせ、現在は爾が全宇宙なり、否、爾自身なり、眞に働くものは最も切實に現在に立ち、現在を充たさんことを希ふ。彼は當面の一事一念に全心魂を打込んで、復其の他を顧みざるなり。彼に取りては現在が唯一の事實なり。彼は貧賤に素して貧賤を行ひ、

貧賤に素して

君子素二其位一而行、不レ願二乎其外一。素二富貴一行二乎富貴一、素二貧賤一行二乎貧賤一、素二夷狄一行二乎夷狄一、素二患難一行二乎患難一。君子無二入而不二自得一焉（中庸）

富貴に素して富貴を行ひ、病痾に素して病痾を行ひ、健康に素して健康を行ふ。彼に於ては、健康・病痾・富貴・貧賤等は必ずしも關心の事ならず。唯、此等樣々なる現在の事件・境遇に處して、自家が全人格の一念を充實せしむること、是其の唯一の願なり。自己現在の一念を充實せしむる、これを外にして、また働といふものゝ眞正合理の形式的解釋はあらざるなり。カーライルが其の謂ふ所の「最も手近き義務」に重大なる意義を附したる、やがておのづから吾人の意と相參するものにあらずや。若し勞働の義をかくの如く解せんか、こゝに忽ち二箇の心靈上の貴さ賜は與へらるゝなり。第一吾人は一生の間、如何なる位置・境遇をも通じて一貫の平安を得べし。第二、如何に異なる位置・境遇の人をも通じて萬人皆平等なる尊嚴の自覺を得べし。吾、昨は貧しくして病み、今日は富みて而して健かなり、されど現在の一念を充たせる「働」の人として、吾は昨も今も同じ平安の態度を持續し來れるにあらずや。彼は天下

の廣居に立ち、吾は草茅無聞の人たり、されど現在の一念を充たせる働」の人として、彼我駢び立つ同じ尊嚴の自覺を有し得るならずや。蕾は蕾の現在の一念を充たし、花は花の現在の一念を充たせり。蕾は蕾の一念に住して開花の想を做さず、花は花の一念に住して結實の想を做さず、其の現住の一念を充たす働に於ては、彼此相軒輊すべき謂れあらず。思ふに眞の勞働に忠なるものはかくならざるを得ざるなり。彼も、此も、同じくこれ天地の働といふ事實なり。

八

勞働は現在の一念を充たす現在主義ならざるべからず。明日爐中の火となるべき、恐るべき自己の運命をも思ひ煩はで、慊然として今の一念を心一杯に咲き匂へる野草澗花は、あはれ我等が範とすべき高調なる現在主義の一ふしにはあらざるか。されど現在主義の語、ともすれば誤解を招き易し。吾人がこゝに提出せる勞働上の現在主義は、かの

通常謂ふ所の世俗的現在主義とは截然として其の意義精神を異にせり。世俗的現在主義は今日主義なり、「その日ぐらし」主義なり、これ漁人樵夫其の他一般勞働者に通有せる生活形式なり。世俗的現在主義必ずしも非ならず。其の現在有る所に足れりとして、泊然として恬澹無繫の生活を送れる點に於て、殆ど自然を友とせる古聖の遺意を得たりとも謂ひつべし。彼等が單純簡素の生活には、往々にして剛毅木訥の仁を見る。以て彼の聲利煩囂の巷に暫くも一念の營みを抛ち得ざる、大俗の躁熱者流を愧死せしむるに足りぬべし。然れども世俗的現在主義は、竟に以て勞働の眞福音とするに足らざるなり。世俗的現在主義と余が勞働上の現在主義と、其の現在を享受する形に於ては相似たりといへども、其の之を受用する所以の意義に於ては甚だしく懸絶す。彼にありては、「我」は現在に呑まれ埋められて、復現在以上に超脱する能はざる趣あるに反して、此にありては、「我」は現在を支配して立つなり。

世俗的現在主義は、現在が行き止りにて現在の奴隷たらんとし、吾人の現在主義は、現在の中にありながら現在を吾に攝取して、わが人格發揮の意味ある道具となすなり。　彼は現在その儘の淺瀨に浮沈すれど、此は現在やがて久遠悠久の生活を打ち開きたる、深奥なる滿足の意識なり。　一の現在主義は人を局促せしめ、他の現在主義は人を開放す。　それ、現在の一念を充たして自ら足れりとする吾人の現在主義には、悠々たる不朽生活の味あり。　吾人はかゝる現在主義に立つて、基督と共に、「明日は明日の事を思ひ煩へ、一日の苦勞は一日にて足れり。」と言ふことを得べく、又孔子と共に、曲肱して水を飲む中にも、名教の樂地を享受するを得べきなり。　こゝに心靈の馨あり、理想の光あり、天地の恩寵に打任せたる歸依の調あり。　クリストの如き、ポーロの如き、アシシのフランシスの如き、皆この意味の現在主義的勞働者なりき。　念佛を正業と見て、衣食住其の他の萬行を助業と見たる法然上人の如き、亦此の意味

ポーロ　基督の使徒の一人
Saint Paul　敬虔な宣教者　歿年未詳
アシシ　イタリヤ國のローマの北四十哩の山の中にある市
Assisi
フランシス　基督教の中世の聖者　フランシス派の開祖
St. Francis (1182–1224)　アシシの人慈愛深くて禽獸までその説教を傾聽したといふ

の勞働の福音を唱へたるものと謂ふべし。　之を以て、かの動もすれば「我等今日飲むべし、食ふべし、明日は則ち死ぬべければなり。」といふがごとき淺薄俗陋なる物質的眼前主義、感覺的功利主義に墮落し易き世俗的現在主義と同視せんは、謬解もまた甚だしきものと謂はざるべからざるなり。

若しそれ、一切の思索・冥想を排し、手足を以て働く働をのみ勞働と解する一種の現在主義が、吾人の謂はゆる現在主義と相容れざるは必ずしも深く辯ずるを須ひざるなり。

九

勞働は神聖なり、人をして、自己の手腕に立つて獨立の生活を營ましむ。それ勞働せずして、報酬を得んとするほど、世に奇怪にして不自然なる矛盾はなきが如く、勞働して報酬を得るほど自然にして順正なる事相はあらざるなり。　働なくして吾等に生存の理由はあらず、吾等

は最後の一息まで、何等かの形に於て勞作せざるべからず、勞作せずして報酬を得んとする思想は人類の恥辱なり。そは卽て個人の墮落なり、國家の滅亡なり。（我が邦今日に於ける投機的精神の盛なるは最も寒心すべし。）吾等は「働かずんば食はず。」といふ覺悟に立たざるべからず。この覺悟、この精神程、人をして剛毅勇敢ならしむるものあらず。或は働いて尙食を得ずといふものあらんか、思ふにかくの如き人は未だ眞に働かざる者、卽ち現在の一念を充實せしむる底の勞作を經驗せざるものゝ言草たるべし。「自然」の組織は、働くものに衣食を給せざるほど、さしも不自然に、貧寒に、慳吝ならず。如何なる種類の働にもあれ、働にはそれに伴ふ自然の報償あり。織るものは卷き、耕するものは穫る、あるは人に勞を藉して一定の工賃を得る、亦おのづからなる報酬の一種ならずや。凡そ自家が正直なる額に汗し、淸き良心もて獲得せる報酬は、皆以て天與の報酬と稱すべし。（但其の如何なる源より入り來

れる報酬が、自家の正直なる汗を汚さゞる、良心を滿足せしむる底のものなるか、之を決定するの標準如何は、おのづから別論に屬すべし。吾人は他を苦しめ、他を倒して得たるがごとき惡者の財を受けて、わが正直なる勞作を飾る報酬となすこと能はず。これ吾人も亦、かゝる報酬を受くることに因りて、間接に他が殺人底の惡行爲に與するものなればなり。吾人の良心は飽くまでもかゝる報酬を受くることを拒絕す。）わが淸き良心を以て獲たる天與の報酬、げに是こそは公明にして純淨、また一點俗世の薰染を帶びざるなり。此の正直なる勞作と、此の純潔なる報酬と、世にこれほど快美底のものあるべしとも思はれず。「中夜の音樂」とはかゝる快美底の實驗を描きたる言葉なるべし。

十

或は、神の恩寵を信ずるものにして尙自力の働を賴むは、驕慢不敬虔の甚だしきものなりと謂はんか。然り、神の無限の恩寵は、吾人の働を以

て言ふにも足らぬ無益のものとなすなり。吾人が區々の働、神の前に何の光かあらんや、神の恩寵は些かも吾人の働、行業の有無大小如何に繫り存せざるなり。これ、優婉の思想なり、謙虛の態度なり、歸依あつき信仰なり。されど尙一歩を深うして考ふれば、神の恩寵そのものと雖も、全く吾人の働の無き所には降るに由なくして、こゝには勞働對報酬の原理の沈々として嚴正に行はるゝを見るなり。夫れ神は世の罪人を憐み給ふ。而も神は彼等を救はんが爲には、其の最後の獨子をして十字架上に慘澹たる血涙を灑がしめ給ひき。これ豈神の大いなる働にあらずや。更に吾等十字架を打仰ぐものは、其の大愛に感發し、猛然として改悔の新生活に入る。これ信ずるものゝ大いなる働にあらずや。かくして十字架は、畢竟神即ち愛する者の働と、人即ち愛せらるゝものゝ働と、この二つの働の結び出したる心靈の救の道たるなり。誰か十字架を以て、何等の働もなき奇蹟的恩恵の贖罪法と視るものぞ。

十字架は神と人との光輝ある働の感應なり。吾人をして恩惠を說くに專らにして勞作を閑却せしむること勿れ。念佛一つ唱ふる働もなき者には、如來も其の大悲の手を下し給ふべきよすがなきなり。彼等は所謂緣なき衆生なり。ポーロが「功績なくして義とせらる。」といふ信仰や、ルーテル（Luther (1483–1546)）が「義人は信仰に因りて生く。」といふ信仰や、皆これ眞心なる意味に於て、心靈の働と稱すべきものにあらずや。信仰の二字、談は決して容易ならず。信仰は吾人の全人格を根柢より衝き動かす力なり、働なり。形式儀文の外的なる働は、吾人をして神の恩寵に與るを得ざらしむ。而して信仰獨り能く神の恩寵に與るを得しむるは何が故ぞ。信仰は靈魂の偉大なる働そのものなればなり。

然らば、我等が働は報酬の爲なりと謂はんか。非なり。働は充實なるべし、純粹なるべし。而して報酬の一念は働の充實性と純粹性とを害

ふものにあらずや。吾等は報酬を目的として働くべからず、而も働くうちに報酬はおのづから伴ひ到る。基督が「先づ神の國とその義とを求めよ。然らば生活上の必需はおのづから加へらるべし。」と言へるものやがて此の意に外ならず。先づ働きて爾が科を盈たせよ、然らば報は自ら來らん。猶快樂を追求せざる無私の活動に、おのづから快樂の隨伴するあるが如し。報酬を求むる一念既に非なりとせば、況して其の打算をや、商量をや。こゝに分配上の正義を說くことなかれ、吾人が高き心靈の威嚴は斷々として勞働對報酬の數量的打算を非とするなり。報酬畢竟上天の恩寵に外ならざればなり。受くるものは謙遜と感謝とを以てすべし、何の誇るべき所あらんや。報酬の法則は恩寵の法則なり。何が故に報酬は恩寵なるぞといふに、報酬を產み出づる勞働そのものが竟に又一種の恩寵なるが故なり。而してかく觀じて、吾人は働の意義に對する最高調、最敬虔の一解に達したることをおぼゆ。

働に神祕の消息あり、働はたゞちに感應の波文を天地の系統に織るなり。働に深奧の意義あり、働はたゞちに「世界之進行」といふ神の車に油さすなり。働くものは神の事業に分け入るものなり、而して神の事業に分け入るものこれやがて神意の實行者に外ならず。何故に働くぞ、神意を實現せんが爲なり。如何にすれば神意を實現し得べき、働きて息まざるにあり。されば基督は又曰く、「吾が父は今に至るまで働きたまふ、吾も亦働くなり。」と。天父の聖旨を實行する外に吾等が働といふものはあらず、勞作これ神に事ふる唯一の祭壇なり。（勞作は禮拜なりといふ一語、こゝに想ひ合せて何等の力ある語ぞ。）耕すもの、織るもの、謠ふもの、考ふるもの、彼等は皆、自家分上の天地の祭司ならずや。されば又、働は我等が自力の沙汰にあらずして、そこに不可見の神意常に加れり。神の攝理の手、回向の光は、不斷に吾等が一切の働と偕に在り。神と偕に働く。吾等が世にありて働くは、譬ふれば猶ほ手習子の師匠

に手を取られて字を書くが如きか。知ると知らざるとを問はず、吾等は神に手を取られて自家分上の事にいそしみつゝあるなり。「天生萬物靈、使之亮天功」「天功を亮けしむ。」の語に囘向の意義ありと、わが友の言へるは甚だ佳し。吾等天功を亮くるにあらず、天功を亮けさせてもらふなり。吾等自ら働くにあらずして、働かせてもらふなり。天地大化の波に乘託せざる何の働かあらんや、何の事業かあらんや。働をして感謝讃美の聲たらしめよ、働をして天地の大愛に對する報恩報德の事たらしめよ。神は吾等をして、「神の子」といふ光榮ある嗣子たらしめんが爲に、其の協働を命じ給ふにあらずや。我等が働は神よりの囘向なり、恩寵なり。ブース氏も亦、謂ふ所の勞働は「聖靈の指導協力に須つべし。」といふ一轉語を下したり。謙遜にして光榮ある此の一箇の自覺、以て吾等が一切の煩悶を解くべし、以て吾等が理想の人格を圓成すべし。而して耶蘇基督は、そが古今獨歩の體現者なり、模範人なり。（病窓雜筆）

天生萬物靈　横井小楠の詩の句

ブース　William Booth (1829－)　救世軍創立者

一三　現代日本の詩歌

北原白秋

北原白秋　文學者詩人　名は隆吉　明治十八年　福岡縣山門郡沖ノ端村生

北原白秋

此の事實こそ驚異である。最近しかも月々に余の許に寄贈されるあらゆる日本詩歌の同人雜誌の數は恐らく百種を超えるであらう。

是等はすべてが有名若しくは無名の青年詩人の詩歌を以て充たされてゐるのである。しかも是等の專門の詩歌雜誌以外、一般向きのあらゆる種類――文藝・政治・經濟・科學或は娯樂・料理・旅行等の、成年男女若しくは兒童の讀みものとしてのほとんどすべて――の雜誌には詩・短歌（三十一音形）俳句（十七音形）小曲・民謠・童謠の類を募集し發表せざるはない。雜誌のみならず、全國の新聞紙が日々、あるひは新年には特別に、各詩歌の大家に依囑して選拔し掲載する詩歌の數は、恐らくまた

異郷人の想像以上であらうと思はれる。

曾てある滋養飲料の釀造會社が新童謡の隆興に乘じて、その廣告政策の一つとして、全國にわたつて兒童の作品を募集したことがあつた。

滋養飲料カルピスの釀造元

其の時に集つた童謡の數が無慮二萬三千篇を突破した事は、別に不思議とも思はれてゐない。

今日の兒童の雜誌の中で余が關係する「赤い鳥」に於て、毎日余が目に觸れる兒童の自由詩のみを數へても三千篇あるひは四千篇に達しない事はないのである。

詩集・詞華集・詩論集の出版の如き、毎年二百には上るであらう。

是等は此の半世紀の間に復興され、革正され、開拓せられたる各種の新らしい日本の詩歌のみであるが、傳統のまゝに繼承され、惰力的に普及され、遂には儀禮として、または茶の湯・生花の如き風雅趣味の生活形式の一つとして、御歌所(皇室直屬の歌會)、あるひは老紳士・淑女階級の間に

依然として勢力ある舊派の短歌、あるひは又庶民藝術として田園の農夫、市井の理髪師の間にまで未だに行はれてゐる舊派の俳句に至つては、それらの作者の數は、殆ど日本人の過半がこれに當るであらう。で、ある意味に於て、日本人のすべてが詩人であり、詩の鑑賞家であるとさへ謂ひ得らるゝであらう。日本に於ては民衆藝術と云ふ言葉はあまりに普遍過ぎる。

寧ろ因習化されて了つてさへゐる。併しかうした舊派の短歌・俳句はもはや現代日本の詩歌とは謂ひがたいものであつて、純粹な藝術の見地よりして、何の問題にもされてゐない。形式ばかりのものである。それ故に、余の紹介は、初めにもどつて最近詩壇の各種各派のそれらについてのみせねばならぬ。

大正六年に日本詩人の總合的團體である詩話會が創立された。翌々

八年にその會より年刊の詞華集「日本詩集」の第一卷が出版された。これには當時主として活動してゐた青年詩人四十四名の詩が網羅された。十年には此の會から連袂脱退した三木露風・日夏耿之助・西條八十・竹友藻風・茅野蕭々・山宮允・堀口大學及び余等によつて新たに新詩會が興された。新詩會はまた直にその詞華集「現代詩集」の第一輯を出版した。こゝにおいて二つの詩會が對立すべく餘儀なくされた。

三木露風今は羅風と改號

この時には、余等が先進であつた明治時代の光輝ある詩人達はほとんど余の沈默を最上とするかの如く見えた。大正六年、新しい日本の詩の父である島崎藤村は、彼の五十回の誕辰をすべての詩人によつて祝賀されたが、詩を廢して小説の創作に移つたのは既にその十數年の以前であつた。薄田泣菫も次いで純粹に新聞記者生活に入り、フランス象徴詩の移植に多大の效績を殘した二人者の中、上田敏は物故し、蒲原有明は主として東邦語源の考證に沒頭し始めた。たゞ河井醉茗が溫

藉平明の詩風を以て次第に枯淡の心境に入りつゝ、公平な、やゝ微溫的なる批判と誘導の目を、時として若き時代の詩人たちに振り向けるばかりであつた。

リズム Rhythm 韻律

デモクラシー Democracy

詩と散文との甚だしい混淆を來したのもこの前後からであつた。形式としての自由詩も、つまる所詩の洗煉されたるリズムの美德は保たるべきにかゝはらず、動もすれば單に行を分けた散文とよりほか見られぬものが現れるやうになつて來た。デモクラシーの思想が詩話會に滿ち擴がつたための混亂は詩の上のみでなく、忌むべきは、其の態度にあつたらう。亂雜と粗暴と愚劣と喧騷とが其處には雜草園の蛙の聲の如く入り亂れた。正しい詩に對する尊敬と理會とは失はれ、たゞ破壞のための破壞、偶像の棄却、天才への冒瀆、自他の價値判斷に對する盲目、先進に對する非禮と傍若無人の言動とがほとんど當然の如くに行はれ始めた。かくして詩壇は第三期の惱みに入つた。これは世界

共通の苦患をこの日本の詩壇も負はねばならぬかの如く見えた。

純正抒情派・印象派・象徴派・神祕派・影象派・民衆派・新民衆派・未來派・表現派・ダヽ派入り亂れて今は收拾すべくもない情態にある。併しながら反詩話會の氣勢が四方に起つて、實力ある新人も漸く擡頭しかけて來たのも事實である。かくして何らかの正しい詩への還元、破壞後の新しい建設の氣運が底深く動き始めたとも思はれる。余は信じてゐる、この詩壇の激しい渦卷は、いつかは沈潛した、しかも照光の燦爛たる一つの水面に歸るべき事を。

さて、今詩壇を通じて、現在に活動しつゝある詩人を紹介すると、先に擧げた新詩會の人々の他には、高村光太郎・木下杢太郎・ヨネ野口・川路柳虹・室生犀星・萩原朔太郎・白鳥省吾・加藤介春・佐藤春夫・佐藤惣之助・千家元麿・大手拓次・富田碎花・柳澤健・百田宗治・野口雨情・生田春月・福田正夫・霜田史光・佐藤清・藤森秀夫等がある。

*　*　*

境涯の藝術を以て最高のものとするならば、日本においては寧ろ短歌の作者にその高處に居る者が比較して多いと思れる。彼等は嚴肅に三十一音の古形式を奉ずる一種の苦行者である。彼等は饒舌を忌む。この萬葉以來の短詩形の中に、彼等は彼等の心法を練る。現代においても未だ是等の鍊金道士は極度の忍耐と操持の嚴正とを保つ。眞の日本歌謠の傳統を傳統とし、一に東洋藝術の精神を精神とする彼等の最高の信條は少なくとも眞の象徴にある。眞の象徴詩は由來東邦のものである。かの傳神といひ、實相觀入といふは單なる寫生とは違ふ。單なる感覺の暗示でもない。寧ろ言語に絶した精氣のかをりである。第六官の活用である。これは芭蕉の俳諧、利休の茶道と相通ずるものがある。近時フランス詩壇に流行するTanka, Haikaiの如き模してその外形にのみ留るかの觀がある。その深處の心法・精神に至つては、遂に

理會されざるものといつていゝ。

また現代の日本短歌に於ける抒情は、原始的短歌の純正抒情を髓とする陰影ふかき菊の花の品位を尙ぶ。

短歌は定格の短詩である故に、その調律の齊整、內觀の統一については拔群の伎倆を要する。少くとも十年二十年の鍛錬を要する。で、放漫な自由詩人等の散文系の所謂詩なるものとは、格段な表現苦を覺悟しなければならぬ。これが爲に古來師弟の關係も嚴格であり、各派の特色も濃厚であり、各人の禮節も正しかつた。彼等は古典に通じ、國體の讃美者であり、常に眞にして新なる美の探求者であるべきである。かの徒らにヨーロッパ詩壇の流行を追つて、外面の新を新とする詩壇人とは大いに趣を異にする。

併しながら、ともすると彼等は偏狹・頑固・因循に陷り易い。實相は常に眞ではあるが、新はまた常に新鮮ではあるが、その觀照の態度に於て、舊

來の踏襲に過ぎない時、すべては黴と腐臭とによつて藝術の生彩を喪失して了ふ。で、感覺官能の解放と心靈の絕えざる洗煉とは常に必要とせねばならぬ。

大正十三年、余等は雜誌「日光」を創刊した。短歌本來の格律を支持し、しかも單なる擬古を喜ばず、我執と偏見を排し、努めて革新の爲の藝術的冒險を恐れざるものゝ一群が各派よりこの雜誌に集つた。古泉千樫・前田夕暮・土岐善麿・川田順・木下利玄・(一九二五年死去)、石原純・折口信夫・吉植庄亮及び余、其の他である。この「日光」同人の活動が今や歌壇に一つの新しい旋風を捲き起しつゝある。

余等のある二三はまた、在來の歌語脈の短歌以外現代語を以てする新短歌の創造をも開拓した。この新短歌は必ずしも三十一音詩とはなり得ない。本質的の語脈の相違を知らずして、强ひて現代語を以て三十一音つゞりたらしめようとする一派が他にあるが、彼等の誤は到底

救はれないであらう。余等がこの新短歌は近代の自由詩とはまた別種の風致、傳統としての短歌の氣品と香氣とを保有する事において特殊であるべく信ぜられる。

由來、詩壇にもさうであるが、短歌の世界には小黨分立の弊が多い。自派擁護の爲にやゝもすれば他流を非難する。此の弊風は容易に打破されないであらう。斯の世界には、一人の師あるひは一つの系統を中心とする百名以上數百名の門下あるひはとりまく者(舊派においては數萬人)の幾つかの集團が各自の機關雜誌に割據してゐる。「明星」―與謝野寛・夫人晶子、「アラヽギ」―島木赤彦・齋藤茂吉・中村憲吉・岡麓、「創作」―若山牧水、「潮音」―太田水穗、「國歌」―窪田空穗、「自然」―尾山篤二郎、「心の花」―佐々木信綱、「水甕」―尾上柴舟、「光」―金子薫園、「あけび」―花田比露志・安江不空、「橄欖」―吉植庄亮、「とねりこ」―河野愼吾、「覇王樹」―橋田東聲・白井大翼、「香蘭」―村野次郎等……である。

前記にもれた諸歌人にまだ吉井勇・平野萬里・石榑千亦・三井甲之・平福百穗・依田秋圃・松村英一・半田良平・宇都野研・植松壽樹・矢代東村・西村陽吉・杉浦翠子・若山喜志子・四賀光子等がある。

附兒、先年以來、余等が起した日本の童謠運動は驚くべき盛大に達した。從つてまた兒童の自由詩の進歩は比例して却て今の詩壇の上にある。日本の兒童は三四歳の幼兒時代より、自己の詩を作りかつ發表するの機關を與へられた。彼等の自然觀照の正確さと鋭さとは、決してまた今の歌人たちに質として劣るものでない。また民謠の復興も見るべきものがある。是等は追つてよき機會を得て、大いに世界的に紹介したいと思つてゐる。(東京朝日新聞)

一四　牛肉と馬鈴薯

國木田獨歩

國木田獨歩
名は哲夫
文學者
千葉縣銚子
町生
明治四十一
年歿
年三十八

明治倶樂部がまだ繁昌してゐた頃のことである。

或冬の夜、二階の食堂に燈火が點いて居て、時時高く笑ふ聲が戸外に漏れてゐた。すると其の玄關へ、外套の襟を立てゝ中折帽を目深に被つた男がひよつくり現れて、いきなり手荒く呼鈴を押した。

國木田獨歩

内から戸が開くと。

「竹内君は來てお出でですかね。」と低い聲の落着いた調子で訊ねた。

「はあ、お出でで御座います。貴方は。」と片眼の細顔の和服を着た受附が丁寧にいつた。

「これを。」と出した名刺には五號活字で岡本誠夫としてあるばかり、何

の肩書もない。受附はそれを受取り急いで二階へ上つていつたが、間もなく降りて來て、「どうぞこちらへ。」と案内した。導かれて二階へ上ると煖爐（ストーヴ）は熾に焚いてあつたので、むつとする程溫い。煖爐（ストーヴ）の前には三人、他の三人は少し離れて椅子に倚つて居る。傍のテーブルにウィスキーの壜が載つてゐて、コップの飲み干したのもあり、注いだまゝのもあり、人々はいゝ加減に酒が廻つて居たのである。

ストーヴ Stove

ウィスキー Whisky 强烈な洋酒

岡本の姿を見るや竹内は起つて、元氣よく「まあ、これへ掛け給へ。」と一つの椅子をすゝめた。

岡本は容易に座に着かない。見廻すと、其の中の五人は豫て一面識位はある人であるが、一人色の白い中肉の品のよい紳士は、まだ見識らぬ人である。竹内はそれと氣がつき、「うん、あなたはまだ此の方を御存知ないだらう。紹介しませう。此の方は上村君と云つて北海道炭鑛會社の社員の方です。上村君、此の方は僕のごく舊い朋友で岡本君……」

とまだ言ひ終らぬのに、上村と呼ばれた紳士は快活な調子で、

「やあ初めて……お書きになつた物は、常に拜見して居ますので……今後御懇意に……」

岡本は唯「どうかお心易く。」と言つたぎり默つてしまつた。そして椅子に倚つた。

「さあ其の先を……」と綿貫といふ背の低い眞黑の頰髯を生やして居る紳士が言つた。

「さうだ、上村君、それから。」と井山といふ眼のしよぼ〳〵した頭髮の薄い、痩形な紳士が促した。

「いや岡本君が見えたから急に行りにくゝなつた。はゝゝゝ。」と炭鑛會社の紳士は少しはにかんだやうな笑ひ方をした。

「何ですか。」

岡本は竹内に問うた。

「いや至極面白いんだ。何かの話の具合で、我々の人生觀を話すことになつてね、まあ聽いて居給へ。名論卓說滾々として盡きずだから。」

「なに、最早大概吐き盡したんですよ。あなたは我々俗物黨と違つて眞物なんだから、幸ひあなたのを聞きませう。ね、諸君。」

と上村は逃げかけた。

「いけない〳〵、先づ君の說を終へ給へ。」

「是非承りたいものです。」

と岡本はウィスキーを一杯、下にも置かないで飲み干した。

「僕のは岡本君の說とは恐らく正反對だらうと思ふんでね、つまり、理想と實際は一致しない。到底一致しない。」

「ヒヤ〳〵。」と井山が調子を取つた。

「果して一致しないとならば、理想に從ふよりも實際に服するのが僕の理想だといふのです。」

「たゞそれだけですか。」と岡本は第一の盃を手にしてうなるやうに言つた。

「だつてねえ、理想は食べられませんもの。」と言つた上村の顔は兎のやうであつた。

「はゝゝゝ、ビフテキぢやあるまいし。」と竹内は、大口を開いて笑つた。

「否ビフテキです。實際はビフテキです。スチューです。」

「オムレツかね。」と今まで默つて眠りかけて居た、眞赤な顔をして居る松木、座中で一番年の若さうな紳士が眞面目で言つた。

「はつ〳〵〳〵。」と一座が噴きだした。

「いや、笑ひどころぢやあないよ。」と上村は、少し躍起になつて、

「譬へて見ればそんなもんで、理想に從へば馬鈴薯ばかり食つて居ないきやならない。ことによると馬鈴薯も食へないことになる。諸君は牛肉と馬鈴薯とどつちが好い。」

ビフテキ　牛肉を脂でいためた西洋料理の一種 Beefsteak

スチュー　西洋料理の一種 Stew

オムレツ　西洋料理の一種 Omelet

「牛肉がいゝねえ。」と松木は又睡さうな聲で眞面目に言つた。

「併し、ビフテキに馬鈴薯はつきものだよ。」と頗髯の紳士が得意らしく言つた。

「さうですとも。理想は即ち實際の附屬物なんだ。馬鈴薯もまるつきり無いと困る。しかし馬鈴薯ばかりぢや全く閉口する。」

と言つて上村はやゝ滿足したらしく岡本の顏を見た。

「だつて北海道は馬鈴薯が名物だつて言ふぢやありませんか。」と岡本は平氣で訊ねた。

「其の馬鈴薯なんです。僕も其の馬鈴薯には散々酷い目に遭つたんです。ね、竹内君は御存知ですが、僕はかう見えても同志社の舊い卒業生なんで、矢張その頃は熱心な信者の仲間で、言ひ換へれば大々的馬鈴薯黨だつたんです。」

「君が」とさも不審さうな顏色で、井山がしよぼ〳〵眼を見張つた。

「何も不思議はないさ。十三年も昔の二十二の時で、それはお目に掛けたい程熱心なる馬鈴薯黨でね、學校に居る時分から、僕は北海道と聞くとぞく〳〵して居たもんで、清教徒（ピューリタン）を以て任じて居たのだから堪らない。」

Puritan ピューリタン

「大變な清教徒だ。」と松木は又口を入れたのを、上村は一寸顎で止めて、ウィスキーを嘗めながら、

「斷然この汚れた内地を去つて、北海道の天地に投じようと思ひましてね。」

と言つた時、岡本はじつと上村の顏を見た。

「そして、やたらに北海道の話を訊いて歩いたもんだ。傳道師の中に北海道へ往つて來たといふ者があると、すぐ話を聽きに出掛けましたよ。處が又先方は旨いことを話して聞かせるんです。やれ自然（ネーチュア）がどうだの、石狩川は洋々とした流だの、見渡すかぎり森又森だの、堪

Nature ネーチュア

つたもんぢやない。僕はすつかり參つちまひました。そこで僕は種々聞き集めたことを綜合してこんな想像を描いて居たもんだ。……先づ僕が自己の額に汗して森を拓き、林を倒しそしてこれに小豆を播く。……」

「その百姓が見たかつたねえ。はつ〳〵……」と竹内は笑ひ出した。

「いや實地やつたのさ。まあ待ち給へ、追ひ〳〵其處へ行くから。……其の中にだん〳〵と田園が出來て來る、重に馬鈴薯を作る、馬鈴薯さへありや食ふに困らん。……」

「そりや、馬鈴薯が出た。」と松木は又口を入れた。

「そこで田園の中央に家がある。構造は極めて粗末だが一見米國風に出來て居る。新英州（ニューイングランド）植民時代その儘といふ風に屋根を急勾配にして、それから北の方へ防風林を一區畫とる。水の澄み渡つた小川が此の防風林の右の方からうねり出て屋敷の前を流れる。無論こ

New England ニューイングランド 北米合衆國の州名

の川で家鴨や鵝鳥が、其の紫の羽や眞白な背を浮べてゐるんですよ。此の川に三寸厚さの一枚板で橋が架つて居る。これに欄干を附けたものか附けないものかと種々工夫したが、やはり附けない方が自然だといふんで附けないことに極めましたよ。まあ構造はこんなものですが、僕の想像はこれで滿足しなかつたのだ。……先づ冬になると、何だか其の冬即ち自由といふやうな氣がしましてね、それに僕は例の熱心なる信者でせう、クリスマス萬歳の仲間でせう。クリスマスと來ると、どうしても雪がいやと言ふ程降つて、軒から棒のやうな氷柱が下つて居ないと嘘のやうでしてね。だから僕は北海道の冬といふよりか、冬即ち北海道といふ感があつたのです。それで冬になると雪がすつかり家を埋めてしまふ。そして夜は窓硝子から赤い火影がちら〳〵と洩れる。折々風がごうつと吹いて來て、林の梢から雪がばた〳〵と墜ちる。牛小屋でホルスタイン種の牝牛が

ホルスタイン Holstein 和蘭原産の乳牛

もうつと唸る。」

「君は詩人だ」

と叫んで床を靴で蹴つたものがある。これは近藤と言つて、岡本が此の部屋へ入つて來て後も一言も發しないで、唯ウィスキーと首引をしてゐた脊の高い、一癖あるべき面構へをした男である。

「ねえ、岡本君。」と言ひ足した。岡本はたゞ默つて首肯いて、

「お話の先を願ひたいものです。」と上村を促した。

「さうだ、先をやり給へ。」と近藤は殆ど命令するやうに言つた。

「宜しい。それから僕は同志社を卒業するや、一年ばかり東京でまごまごして居たが、斷然と北海道へ行つた。其の時の心持といつたら無いね。何だかかう『馬鹿野郎』といふやうな心持がしてね、上野の停車場で汽車に乘つて、ぴゆうつと汽笛が鳴つて動き出すと、僕は窓から頭を出して、東京の方へ向いて唾を吐きかけたもんだ。そして何

ウイスキー Whisky 强烈な洋酒

とも言へない嬉しさがこみ上げて來て、人知れず手巾で涙を拭いたよ、本當に。」

「一寸君、その『馬鹿野郎』といふやうな心持といふのは僕には了解が出來ないが……そりやどう言ふんだね。」

と權利義務の綿貫が眞面目で訊ねた。

「唯東京の奴等を言つたのさ。名利に汲々として居る其の醜態は何だ、馬鹿野郎、乃公を見ろ、といふ心持さ。」

上村も眞面目で註解を加へた。

「それから道行は拔きにして、兎も角も北海道は札幌へ着いた。馬鈴薯の本場へ着いた。そして苦もなく十萬坪の土地が手に入つた。さあこれからだ、所謂額に汗するのはこれからだといふんで、直に開墾事業に着手し、小作人の一人二人を相手に、三月ばかり辛抱したね。其處で夏も過ぎて樂みにしてゐた冬といふ例の奴がだん〳〵近づ

いて來た。其の露拂が秋、第一、秋からして思つたよりは感心しなかつたのさ。森とした林の上をぱら〳〵と時雨れて來る。日の光が何となく薄いやうな氣持がする。相手は無しさ、食ふ物は一粒幾らと言ひさうな米を少しばかりと例の馬の鈴。寢る處は木の皮を壁に代用した掘立小屋。」

「それはあなた覺悟の前だつたでせう。」と岡本が口を入れた。

「其處ですよ、思想よりか實際のいゝ方がいゝと言ふのは。覺悟はして居たものゝ矢張餘り感服しませんでしたね。第一それぢや痩せますもの。」

かう上村は言つてから盃で口を濕して、

「僕は痩せようとは思つて居なかつた。」

「はつ〳〵〳〵。」と一同笑ひ出した。

「そこで僕はつく〴〵考へた。これは馬鹿げきつてゐる、止さう。と

言ふんで止しちまつたが、あれであの冬を過したら僕は死んで居たね。」

「そこでどうだと言ふんです、あなたのお説は。」

と岡本は嘲るやうな、眞面目な風で言つた。

「だから馬鈴薯には懲々しましたと言ふんです。何でも今は實際主義で、金が取れて、旨いものが喰へて、斯うやつて諸君と煖爐にあたつて、酒を飲んで、勝手な熱を吹合ふ。腹が空いたら牛肉を食ふ……」

「ヒヤ〳〵、僕も同説だ。仁義道德だつて何だつて牛肉と兩立しないことはない。それが兩立しないといふなら兩立させることが出來ないんだ。そいつが馬鹿なんだ。」

と綿貫は大いにいきまいた。

「僕は違ふね。」と近藤は叫んだ。そして煖爐を後に椅子へ馬乘りになつた。凄い光を帶びた眼で座中を見廻しながら、

「僕は馬鈴薯黨でもない、牛肉黨でもない。上村君なんかは最初馬鈴薯黨で後に牛肉黨に變節したのだ。即ち薄志弱行だ。要するに諸君は詩人だ、詩人の墮落したのだ。だから無闇と鼻をひく〳〵させて牛の焦げる匂を嗅いで歩く。其の醜態つたらない。」

おい〳〵他人を悪口する前に、先づ自家の所信を吐くべしだ。君は何の墮落なんだ。」

と上村が切り込んだ。

「墮落？　墮落たあ高い處から、低い處へ落ちた事だらう。僕幸ひにして最初から高い處に居ないから、そんな見つともないことはしないんだ。君なんか主義で馬鈴薯を食つたのだ。好きで食つたのぢやない。だから牛肉に餓ゑたのだ。僕なんか牛肉が好きで牛肉を食ふのだ。だから最初から餓ゑぬ代りに今だつてがつ〳〵しない。」

「一向要領を得ない。」

と上村が叫んだ。近藤は直ちに、

「なに、要領を得ないたあ何だ。大いに要領を得て居るぢやないか。君等は牛肉黨なんだ。牛肉主義なんだ。僕のは牛肉が最初から好きなんだ。主義でも絲瓜でもない。」

「大いに贊成ですなあ。」と靜かに落着いた聲でいつた者がある。「贊成でせう。」と近藤はにやり笑つて岡本の顏を見た。

「至極贊成ですなあ、主義でないと言ふことは至極贊成ですなあ。世の中の主義つて言ふ奴程愚なものはない。」

と岡本は、其の冴え〳〵した眼光を座上に放つた。

「其の說を承らう、是非願ひたい。」と近藤は其の四角な顎を突き出した。

「君はどちらなんです、牛と薯、え、薯でせう。」と上村は知つた顏に岡本の說を誘うた。

「僕もやはり牛肉黨に非ず、馬鈴薯黨に非ずですな。しかし近藤君の

樣に牛肉が好きともきまつて居ないんです。勿論、例の主義といふ手製料理は大嫌ひですが、さりとて肉とか薯とかいふ嗜好にも從ふことが出來ません。」

「それぢや何だらう。」

と井山が其の尤もらしいしよぼ〳〵眼をぱちつかせた。

「何でもないんです。譬喩は廢して露骨に申しますが、僕はこれぞといふ理想を奉ずることも出來ず、それならと言つて俗に和して欲望を充たして、以て我が生足れりとすることも出來ないのです。出來ないのです、しないのではないので。實を言ふとどちらでもいゝからきめてしまつたらと思ふけれど、何の因果か、今以てたつた一つ不思議な願を持つて居るから、其の爲に何方ともきめ得ないで居ます。」

「何だね、其の不思議な願と言ふのは。」

と近藤は例の壓しつけるやうな言ひぶりで問うた。

「一口には言へない。」

「まさか狼の丸燒で一杯飲みたいといふ洒落でもなからう。」

「まづそんなことですが……」

と岡本は眞面目で語り出した。

「しかし、諸君にして若し僕の不思議なる願を聽いてくれるなら話しませう。」

「諸君は知らないが、僕は是非聽く。」

と近藤は腕を振つた。みんなは唯默つて岡本の顏を見て居た、松木と竹內は眞面目で、綿貫と井山と上村とは笑を含んで。

「僕の不思議な願といふのは頗る大なる願、深い願、熱心な願で、かの『朝に道を聞かば夕に死すとも可なり。』といふのと、大いに意義を異にして居るけれども、其の心持は同じです。僕は此の願が叶はん位なら、今から百年生きて居ても何の役にも立たない一向嬉しくない、寧

ビスマルク　Bismarck (1815–1895)　プロシヤの政治家　獨逸聯邦の建設者

カヴール　Cavour (1816–1861)　伊太利の政治家

グラッドストン　Gladstone (1809–1898)　英國の政治家財政家雄辯家

ろ苦しく思ひます。全世界の人悉く此の願をもつて居ないでも宜しい。僕獨り此の願を追ひます。僕が此の願を追うたが爲に、其の爲に罪を犯すに至つても僕は悔いない。如何なるものでも與へます。若し鬼ありて僕に保證するに、『爾の子を與へよ、我これを喰はん、然らば我は爾に爾の願を叶はしめん。』と言はゞ、僕は雀躍して妻あらば妻、子あらば子を鬼に與へます。」

「こいつは面白い。早く其の願といふものを聞きたいもんだ。」

と綿貫が、其の髯を力任せに引いて叫んだ。

「今に申します。諸君は今日の政治には飽きられたらうと思ふ。そこでビスマルクとカヴールとグラッドストンと豐太閤見たやうな人間を搗きまぜて、一つ鋼鐵のやうな政府を作り、思ひ切つた政治をやつて見たいといふ希望もあるに相違ない。僕も實にさういふ願を持つて居ます。併し僕の不思議なる願はこれでもない。

聖人になりたい、君子になりたい、慈悲の本尊になりたい、基督や釋迦や孔子のやうな人になりたい、本當にさうなりたい。しかし若し僕の此の不思議なる願が叶はないでもつてさうなるならば、僕は一向聖人にも神の子にもなりたくありません。

山林の生活、と言つたばつかりで僕の血は沸きます。僕をして北海道を思はしめたのもこれです。僕は折々郊外を散歩しますが、此の頃の冬の空晴れて遠く地平線の上に國境をめぐる連山の雪を戴いてゐるのを見ると、すぐ僕の血は波立ちます。堪らなくなる。しかしです、僕の一念一たびかの願に觸れると、こんな事は何でもなくなる。若しも僕の願さへ叶ふなら、黃塵萬丈の都會に車夫となつて居ても宜しい。

宇宙は不思議だとか、人生は不可解だとか、天地創生の本源は何だとかやかましい議論があります。科學と哲學と宗教とは、之を研究し、

闡明し、そして安心立命の地を其の上に置かうと悶えて居る。僕も大哲學者になりたい、ダーウィン（ダーウイン　英國の進化論主唱者　Darwin (1809–1882)）跣足といふ程の大科學者になりたい。併し僕の願が叶はないでもつて大哲學者になつたなら、僕もない。若しくは大宗教家になりたい。

は冷笑して自分の顏に『僞』の一字を烙印します。」

「何だね、早く言ひ給へ、その願といふやつを。」

松木はもどかしさうに言つた。

「言ひませう、喫驚しちやいけませんぞ。」

「早く〳〵。」

岡本は靜かに、

「喫驚したいと言ふのが僕の願なんです。」

「何だ、馬鹿々々しい。」

「何のこつた。」

「落語か。」

人々は投げ出すやうに言つたが、近藤のみは默つて岡本の說明を待つて居るらしい。

「斯ういふ句があります。」

「あはれ、眠半ばにして夢魔に魘はれたるもの、目覺めよ。身を震はせ、この魔を逐ひ、而して汝の覺束なき眠より覺めよ。」

「卽ち僕の願とは、夢魔を振ひ落したいことです。」

「何のことだか解らない。」と綿貫は眩くやうに言つた。

「宇宙の不思議を知りたいといふ願ではない、不思議なる宇宙を驚きたいといふ願です。」

「愈、以て謎のやうだ。」と今度は井山が其の顏をつるりと撫でた。

「死の祕密を知りたいといふ願ではない、死てふ事實に驚きたいと言ふ願です。」

「いくらでも君勝手に驚けばいゝぢやないか。何でもないことだ。」と綿貫は嘲るやうに言つた。

「信仰そのものは必ずしも僕の願ではない、信仰無くして片時たりとも安んずる能はざる程に、此の宇宙人生の祕義に惱まされたいことが僕の願であります。」

「成程こいつは益、解りにくいぞ。」

と松木は眩いて、岡本の顏を穴のあく程凝視めて居る。

「寧ろ此の使ひ古るした葡萄のやうな眼球を剜り出したいのが、僕の願です。」

と岡本は思はず卓を打つた。

「愉快々々」と近藤は思はず聲を揚げた。

「ウォルムスの大會で王侯の威武に屈しなかつたルーテルの膽を食ひたいとは思はない。彼の十九歳の時學友アレキシスの雷死を眼

ウォルムス　ライン河の左岸にある市 Worms　一五二一年ウォルムス大會を開く

ルーテル　Luther (1483-1546)　獨逸の宗教改革者

前に視て死其の者の祕義に驚いた其の心こそ僕の欲する所であります。勝手に驚けと言はれました、綿貫君は。勝手に驚けとは至極面白い言葉である。しかし決して勝手に驚けないのです。僕等は生れて此の天地の間に來るや、無我無心の小兒の時から色々な事に出遇ふ。毎日太陽を見る、毎夜星を仰ぐ、是に於てか此の不思議なる天地も一向不思議でなくなる。生も死も、宇宙萬般の現象も尋常茶飯となつてしまふ。哲學で候の、科學で御座るのと言つて、自分は天地の外に立つて居るかの態度を以て此の宇宙を取扱ふ。そこで僕の願は如何にもして、古び果てた習慣の壓力から脫れて、驚異の念を以つて此の宇宙に俯仰介立したいのです。其の結果ビフテキ主義とならうが、馬鈴薯主義とならうが、將た厭世の徒となつて此の生命を詛はうが、決して頓着しない。結果は頓着しません、原因を虛僞に置きたくない。習慣の上に立つ

て、遊戯的研究の上に前提を置きたくない。やれ月の光が美だとか、花の夕が何だとか、星の夜はどうだとか、要するに滔々たる詩人の文字は、あれは道樂です。彼等は決して本物を見て居ない、まぼろしを見て居るのです。習慣の眼が作るところのまぼろしを見て居るに過ぎません。感情の遊戯です。哲學でも宗教でも其の本尊を知らぬことは其の末代の末流に至つては悉くさうです。

僕の知人に斯う言つた人があります。『吾とは何ぞや、なんていふ馬鹿な問を發して自ら苦しむものがあるが、到底知れないことは如何にしても知れるもんでない。』とかう言つて嘲笑を洩した人があります。世間並からいふと其の通りです。しかし此の問は必ずしも其の答を求むるが爲に發した問ではない。實に此の天地に於ける此の我てふものゝ如何にも不思議なことを痛感して自然に發した る心靈の叫である。此の問そのものが心靈の眞面目なる聲である。

これを嘲るのは其の心靈の痲痺を白狀するのである。僕の願は寧ろ、如何にかして此の問を心から發したいのであります。處がなかなか此の問は口から出ても心からは出ません。

我何處より來る、我何處へ往く、よく言ふ言葉であるが、矢張此の問を發せざらんと欲して發せざるを得ない人の心から宗教の泉は流れ出るので、詩もさうです。だから其の以外は悉く遊戯です、虛僞です。」

もうよしませう、無益です、いくら言つても無益です。……あゝ草臥れた。しかし最後に一言しますがね、僕は人間を二種に區別したい。

曰く驚く人、曰く平氣な人……」

『僕はどちらへ屬するのだらう。』と松木は笑ひながら問うた。

「無論、平氣な人に屬します。こゝに居る七人は皆平氣の平左の種類に屬します。いや世界十幾億人の中、平氣な人でない者が幾人ありませうか。詩人・哲學者・科學者・宗教家・學者でも、政治家でも、大概は皆

平氣で理窟を言つたり、悟り顏したり、泣いたりして居るのです。僕は昨夜一つの夢を見ました。死んだ夢を見ました。死んで暗い道を一人でとぼ〳〵辿つて行きながら、思はず『まさか死なうとは思はなかつた。』と叫びました。全くです、全く僕は叫びました。

そこで僕は思ふんです。百人が百人、現在、人の葬式に列したり、親に死なれたり、子に死なれたりしても、矢張自分の死んだ後、地獄の門でまさか自分が死なうとは思はなかつたと叫んで、鬼に笑はれる仲間でせう。はつ〳〵〳〵。」

「人に驚かして貰へばしやつくりが止るさうだが、平氣で居て牛肉が食へるのに、好んで喫驚したいと言ふものも物數奇だね。はゝゝゝ。」

と綿貫は其の太い腹をかゝへた。

「いや、僕も喫驚したいと言ふけれど、矢張單にさう言ふだけですよ。はゝゝゝ。」

「唯いふだけのことか、ひゝゝゝゝ。」

「さうか、唯お願ひ申して見る位なんですね、はつ〳〵〳〵。」

「矢張道樂でさあ、あつはつはつはつ。」

と岡本は一緒に笑つたが、近藤は岡本の顏に言ふべからざる苦痛の色を見て取つた。（獨歩集）

一五　草の光

吉田　絃二郎

吉田絃二郎
本名は源次郎
文學者
明治十九年
佐賀縣生

いつまでも私の心をして子供の心であらせたい。

若い草の葉はやはらかに太陽の光を抱擁してゐる。

老いたる草の葉はかたくなに太陽の光を反撥してゐる。

若い草の葉を見ると、私は若い草の柔順さを羨む。

子供を見ると、私はあの澄んだ黑い眼の前にほゝ笑みたくなる。尊くさへ思ふこともある。

吉田絃二郎

老いたる草の葉を見ると、私は自分の心の老いて行くことを悲しむ。年々に自分の心のかたくなになつて行くことを悲しむ。

言葉は魂の響であると言つた詩人がある。

子供の聲は澄みきつてゐる。子供の魂は澄みきつてゐるのであらう。」

年寄るにつれて人間の聲はかすれてゆく。年寄る毎に人間の魂は傷けられてゆくのであらう。

子供はいつも歌ふ、ありつたけの聲をしぼつて。

今朝は大雪であつた。

私の家の隣の廣い草原も、今日はすつかり深い雪につゝまれてしまつ

た。

通りかゝりの小學校の子供の一人が草原の雪を見て、「あゝ見事。」とませた口の利き方をした。

第二の子供第三の子供も同じやうに、「あゝ見事。」と叫んだ。

そして次の刹那には、子供たちはコーラスを作つて、「あゝ見事、見事。」と歌ひ出した、きはめて單調な節をつけて。

子供たちの姿が木立の蔭に隱れてしまつても、まだ「あゝ見事、見事。」といふコーラスの聲は雪空にひゞいてゐた。

私は思つた。

人間は幾つくらゐから、歌はなくなるのだらう。

人間はなぜ大人になると歌はなくなるのだらう。

人間が大きな聲で歌はなくなるころから、虛僞だの僞善だの僞藝術だ

コーラス Chorus

のが生れて來るのではないだらうか。

世界中の大人が申し合せて、今日から子供と同じやうに雪を見ても雨を見ても大きな聲で歌ふやうになつたら、私たちの世界がもつと明るく、もつと住みごこちよく、もつと正直に、もつと深切になるのではないだらうか。

世界中の人がかつてはみんな可憐な即興詩人であり、即興唱歌手であつた。

歌も歌はないで人と人とが憎み合つたまゝ死んで行かねばならぬといふことはたまらなく悲しいことである。

誰も人のゐない寂しいところへ行つて、思ふ存分大きな聲で歌つて見たい日がある。

なぜか知らぬが。

誰も人のゐないところで、思ふ存分自分のからだを投げだして土の上にころげまはつて見たい日がある。なぜか知らぬが。

夜、町を歩いてゐて、ふと空を仰ぎ見て、久しいこと空を見なかつたことに氣附くことがある。「こんなに美しい星があるのに、なぜ夜の空を忘れてゐたらう。」と思ふことがある。

そんな時は、自分の荒んでゆく心を呪はしく思ふこともあるが、あまり地上の悲みが多いために、いつも俯向きがちに町を歩いてゐる自分の魂をあはれと思ふ。

空を仰ぐほどのゆとりを持たなくなつた自分自身の生活をいたましくも思ふ。

パリサイの徒 Pharisees

サドカイの徒 共にキリストのころユダヤ人の間にあつた黨派

Sadducees モーゼの法律を墨守して形式に囚はれたもの

透谷 北村門太郎 文學者 明治二十七年歿 年二十七

印度の傳說のうちに、神が人間を拜んでゐたといふことがあるさうだが、宗教家も人間を拜まなければならぬ。學者も人間を拜まなければならぬ。

宗教家が「おれは宗教家である。」と考へた時、そこに非人間的なパリサイやサドカイの徒が生れる。

說教壇の上に立つてゐて說教をすることを恥ぢる宗教家は尊敬したくなる。

立派な藝術を生みながら、なほ自分の藝術を恥ぢる藝術家は尊敬したくなる。

私は透谷といふ人の物をまだ讀んだことはない。けれども透谷といふ人は大抵の明治時代の作家よりは私になつかしく思はれる。

立派な藝術家でさへあるならば、たとひ一篇の詩をも作らないとして

も、彼が此の世にかつて生存したといふ事實だけで、人生に何等かのさげ物を齎してゐるのではないかと思ふ。

キリストはたとひ説教をしなかつたとしても、或はたとひ一人の弟子をも持たなかつたとしても、一生ナザレの大工として平凡な生活を送つたとしても、彼がかつてユダヤに生きてゐたといふ事實だけで、人生に光を與へることができたでなかつたらうかと思ふ。

ナザレ　パレスタインの市　キリストが幼時住んでゐた處　Nazareth

もし空に、無數の星の群のなかにたゞ一つの黑い星があらはれたとしたら、どんなに夜の空の美がそこなはれるであらう。

もし私たちの生涯に、たゞ一人の人が絶えず私たちに對して憎みのメスを研いでゐるとしたら、私たちの生涯はどんなに寂しいことであらう。』

メス　オランダ語　小刀　Mes

空には一つも黑い星はない。

けれども人間の世界にはあまりに多くの黑い星がある。

キリストにすらユダがあつた。

ユダ　十二使徒の一人　銀三十枚でキリストをユダヤに賣つた

人間は永劫に憎みから救はれることはできないものだらうか。

愛する者の前に跪いた刹那に、もし自分を憎む敵の眼を思ひ出さなければならぬとしたら、私たちの愛は本當に脆いものである。

たとひ千人の愛する者を持つたとしても、たゞ一人の憎む者を持つてゐる間は、私たちの愛は脅されてゐる。

「神の祭壇に獻物をする前に、その兄弟とやはらげ。」と言つたキリストの言葉が始めてこのごろ私の胸にはつきりと響いて來たやうな氣がする。

お互に寛容であれ、お互に人の罪を赦し合はうではないか。一人でも憎みのメスを懷に隱してゐる者がある間は、人間の世界は救はれない。

人間みんながこんな心持から一緒に抱き合つて踊るやうになる日がいつかは來るにちがひないとも思ふ。

もしそんな日が來ないのなら、人類はこの刹那に滅びてしまつても惜しくはない。

キリストも釋迦も人類のために人類全體の踊の音頭を取らうとしたのであつた。

まだしかし人類は踊ることを躊躇してゐる。なぜ私たちは踊らないのだらう。

誰でもいゝ、も一度キリストや釋迦のやうに眞先に立つて大きな聲で音頭をとつてくれゝば。

それでも或は臆病な人類はなか〳〵踊らないかも知れない。

けれど音頭取が後から後からと出て來て飽きさへしなければ、きつと何時かは人類全體が踊り出すにちがひない。（草光る）

幸田露伴
名は成行
小說家
國文學者
文學博士
慶應三年生

方丈
印度のベイシャリ國の維摩居士の石室一丈四方であつたといふより出た語

迦葉
釋迦の十人弟子の一人
釋迦が靈鷲山で蓮華を拈り默して四衆を見ると誰も之に應ずるものがない只迦葉のみ佛の意を悟つて微笑したといふ

一六一分

幸田露伴

幸田露伴

方丈の小室に天地の粹を凝らして、一爐の火香に心身の春を喚ぶ茶伯の平生こそ清らにして又物寂びたれ。閑庭塵なくして僅に落葉あり。徑の石露に濕ひて、苔微かに點ぜんとする桐の下蔭、椎の葉越、海すこし見る夕月夜の幽趣を賞して、古錨しづかに起る松の聲、濤の音に會心の笑みを漏らす自點の興、詩にあらずしてこれ詩、歌にあらずしてこれ歌なり。徐ろに獨詣の境地を拓き開いて、先哲未到のところに坐せんとす。床の花を觀て破顏する時は迦葉の心を超え、羅國の香を聞いて肅然たる折は香嚴童子の悟を探る。煩惱を斷ぜずして菩提を證する毘耶離の洒落をこゝに現じて、色香に沒在するも不背實相と天台の立義を身に占

香嚴　唐の香嚴山の智閑禪師

毘耶離　ベイシヤリ國

李・杜　唐の詩人李白と杜甫

百丈　支那の禪僧懷海百丈山に住し百丈禪師といふ　唐の元和九年(一四七四)寂　壽九十五

雲門　支那の禪の雲門宗の開祖文偃　雲門山に住す　後漢の乾祐二年(九四九)寂

めて體す。これ佛にあらずして而も佛これ祖にあらずして而も祖なり。されば一字一句の推敲に痩男の肺肝を摧くことこそ無けれ、一器一物の取捨には風雅の心腎を揉みぬいて、長短高低の鹽梅に切磋の思を鋭くすることは、聲調情意の苦勞に鍛錬の慮りを焦がすと異ならで、彼には鬼才も血を嘔き、此には大匠も神を傷らんとす。彼の痛棒に肩胛を痛めて、熱喝に膽を破ることは無けれども、三更の雪に坐する僧堂裡の工夫、曉天の雲に勵む叩關の瓦礫、乾坤を坐斷し、山河を拔飜する意氣はこれにもありて一絲半縷の少しき差にも、肯はず肯はれざるあり、鷄啐雛啄やゝ合せざれば或は非とし或は非とせらる。茶漚たゞ輕く結べども、此の中に詩情と歌情とを結び、熱湯たゞ烈しく沸れども、其の間に、佛意と祖意とを沸らす。李・杜の腔子の裡には、凡鳥翔り入る能はず、李・杜自ら知るのみ。百丈・雲門の頭顱の上をば蒼蠅何ぞ能く瞰ん、百丈・雲門も、若しくは自ら見ざらん。劣才の望は滿ち易かれども、良工は

利休　茶人千宗易　和泉國堺の人　豐臣秀吉に仕へた　天正十九年(一五九一)死　年七十一

心常に苦しむ習ひ。

利休は先刻より獨り寂然として、爐前に坐したるまゝ、少時動かず、眼はたゞ一つの小香爐に注がれたり。わびておもしろき一室の中、清らなるのみにして冗物なく、白玉椿潔く白うして床に一塊の雪物言はんとす。花に風情あれど主人顧みず、空は遊塵を絶ちて晝悠々たり。垂簾日光を和めて紙窓程よく明るき數寄屋に、舍きて復取り、取りて復舍き、眺めては味はひ、味はひては眺むる香爐は何時の名工か造れる。釉色麗らかに匂ひて碧穹の春の影を泛べ、塼埴やすらかに生れて妙手の靈の象を結び成せる、汲めども盡きぬ韻趣の溢れて、氤氳として騰るごとく見ゆ。見らるゝ、器、視る叟。他は無言の妙威を保ちて、自は不說の密意を含むに、其も語らず、此も語らず、不斷の釜の沸る音のみ、浙江潮衰へて濤やうやく收らんとする響を曳けり。

時に通ひの口の襖、音靜かに明きて、利休が妻やをら席に入り來りぬ。

鴛鴦すでに老いたれども、猶共に一水を守り、松柏變らず、能く互に同色を契る。夫婦の姿今ははやく枯らびたれど、優婆塞・優婆夷、情更に眞なり。「何事に御心をさのみは潛ませ給ひて、少時は御聲だにせさせたまはざりつる。」と問ふ。香露翻に墜ちて鶴の夢搖ぎ、微風巖をおとづれて蘭かすかに點頭き、「事と云ふべき事もなけれど、今朝人の得させつる此の香爐を視て。」といふ。一啜、味を解すべし、七碗、古人おろかなり。夫の言葉を聞くとひとしく、宗恩ははやく眼を香爐に留めて、春の宵、淡き星の光の花の梢をそと撫づるごとく、いと柔かに打瞻りたり。二人がなかに香爐一個、青磁の碧みの中に四つの眼の波寄りて溶けて、一體の形の上に雙つの心繞はりて駐る。左視右視してしばらく時を經しが、雪は午にして草の緑あらはれ、水は冬にして石の白き出づ。言說なきが裏に神會の通ずるあり。宗恩面を轉じて夫の方を見、「釉と申し、形と申し心よき作にこそ。されど此の脚の一分高過ぐると見たまへるにはあら

麻姑　鳥のの爪のやうな爪を持つた仙女痒い處が思ふやうに搔けるといふ

庖刀　今臣之刀十九年矣、所解數千牛矣。而刀刃若新發於硎。彼節者有間、而刀刃者無厚。以無厚入有間恢々乎其於遊刃、必有餘地矣。是以十九年、而刀刃若新發於硎。

ずや。一分高きやうに見えて。」といふ。正に痒處に觸着す麻姑の爪、其の時、利休おのづからに笑みて、「儞もさ思ふか。我もさは思ひつる。一たび肌らせては復續がせん術なければ、此の工人の技を惜みて少時躊躇ひけるが、まことに一分過ぎたり。」といふ。一分なり、たゞ一分なり。知らざる者は言ふに足らずとせんも、金針の瞳に臨む、毫釐の差を爭ひ、庖丁の刃を遊ばしむる、唯厶微の間なり。甘きも非、鹹きも非、易牙の魂は甘鹹の和を尋ぬるに苦しみて、遲きも敗、速きも敗、韓信が心は遲速の適を圖るに煎らる。三百餘處、處々皆石を下すべきも、碁聖の石を下す、必ず處を同じうす。極致唯一あり、妙着畢に二なし。利休も笑へば宗恩も笑み、花は無くとも、薄霞、山と川とに春渡る、何とは無しの溫かさ。老の妹背の濁り無き仲美はしう明るうて、解いて解かるゝ心と心。「然らば玉師に磨らせませう。」と、器は終に一分磨られぬ。孔明・周瑜、掌を開けば同じ火字なり、一分違はぬ趣味の眼の高きと高きと相會うたる、夫

なりけり、婦なりけり。（洗心錄）

易牙　支那の昔周の代の料理に長じた人

孔明　諸葛亮　支那の三國時代蜀漢の劉備に仕へ周瑜と共に、魏の曹操を赤壁に破る

周瑜　支那の三國時代吳の孫權に仕へ魏の曹操を赤壁に破る

現代文新鈔　卷五　終

大正十五年六月七日
文部省檢定濟

大正十五年五月廿五日　印刷
大正十一年十二月廿五日　發行
大正十一年十一月廿日　訂正
大正十二年十一月廿八日　修正
大正四年十一月廿日　訂正
大正二年十一月廿日　再版發行
大正十年十一月廿日　再版發行
大正十年十一月廿日　再版發行
大正十年十一月廿日　再版發行
大正十年十一月廿日　再版發行

定價
卷一　金三拾九錢
卷二・四　金三拾八錢
卷三・五　金三拾七錢
昭和五年度臨時定價　金六拾五錢
金六拾參錢
金六拾壹錢

著作權所有

編者　東京市小石川區高田老松町五十二番地　吉田彌平

發行兼印刷者　東京市神田區通神保町六番地　上原才一郎

發行所　東京市神田區通神保町六番地　光風館書店
（電話神田三〇八七番）
（振替口座東京三二七番）

本館發行の教科書は常に多數の製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接御註文被下候はゞ直に御送附可致候

広島大学図書
2000065465